

---

# 「なんで……？」

ハシルケンシロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「なんで……？」

### 【Nコード】

N7631A

### 【作者名】

ハシルケンシロウ

### 【あらすじ】

俺はやめると言ったのに、『まーちゃん』、『隆行』と付き合い合ったんだ……。『あの女』が黙ってねえからやめとけって言ったのに……。『あのこと』からたった一年で結婚しちまったんだ……。

## 1 『さよなら』（プロローグ）（前書き）

前作『監獄』の流れを汲んではいますが、今回は真面目なホラーを目標に頑張ります。

最後までお付き合い頂ければ幸いです。

# 1 『さよなら』（プロローグ）

七海は家路を急いでいた。

通い馴れた道。

何もかも知り尽している筈の道。

だから、この道の危険度は充分理解しているつもりだった。  
それが油断に直結したのかも知れない。

或いは、結婚を翌日に控え、浮かれていたからかも知れない。

七海は聞いてしまった。

自動車のブレーキが突然最大限に踏み込まれ、制動距離があやふやになってしまったタイヤの悲鳴を。

七海は気付いてしまった。それが自分に向かって急接近していることに。

そして、見てしまった。

その悲鳴の主がもう手遅れな程、目の前に迫っているのを……。

『何でわたしが……、  
死にたくない……。』

明日結婚なのに！

何で！

助けて！

助け……』

自動車は七海の臓物を押し潰し、頭蓋骨をへし折って、前方の石垣に激突して……、

燃えた。

石垣と自動車の間には……、

七海……。

『隆行……、

ごめんね……。

最期に……、

……、……、……会いたい……。

せめて……、わたしの口から……、さ……、よ……、……、……』

炎は、まだ意識のあった七海の体を、心を、命を、その存在全てを焼き尽してしまった……。

# 1 『さよなら』（プロローグ）（後書き）

ホラーでは初連載になりますが、いつもの持病『落ち切つてない病』  
が出ないように気を付けます。

## 2 七海編 第一部『閉ざされたあの世への入口』

どんよりと曇った空。

吹き荒む風。

向こうには、日本の城の様な巨大な建物。

その存在感、圧迫感に押し潰されてしまいそうだ。

今まで経験した事もない強風が、ここがただの城ではないことを物語っているようだった。

辺りを見回すと延々と荒野が広がっている。

目標とできそうな場所は、城しかない。

《ここは……、どこだろう？》

見たこともない風景だ。

全く知らない場所に一人で放り出される不安。得体の知れないものに立ち向かわねばならない恐怖が七海の心に重くのしかかる。

《わたしは……、死んだ》

それは認識できている。

だが、

この光景は自分がイメージしていた【あの世の入口】とは大きくかけ離れている。

《とりあえず城に行くしか無さそうだ》

七海は城へと向かう……。

目の前には門。

それは、まるで七海の入門を拒否しているかのように高く高くそびえ建っている。

《ここが入口なのかな》

そう思い、扉に手を触れようとした刹那、それは訪れた。

ここはあの世の入口【西の門】……。

ここには、事故で亡くなった方が訪れます

声と同時に空間が歪み、そこから小柄な人型が現れる。  
始めはもやもやしたエネルギー体でしかなかったそれは、時間と共にその形状をはっきりとした形に変えていく。

《……、お化け……？》

空中に浮遊し、融合と凝縮を繰り返すその青白く輝く人型のエネルギー体は、遂に一人の人間としての姿を現し始めた。

小柄な体躯、背丈の割に長めの脚。

がっちりした筋肉質の体格は、アスリートを思わせる。



だが、それよりもっと印象的だったのは、チェーンジャラジャラの革ジャン、革パンツに、ツンツンに立てた赤い長髪という、典型的なパンクルックだったことだ。

この亡霊が馬鹿丁寧な口調で語り掛けてくるのだ……。

もはや、【笑える】という感情を超越した不気味さを感じずにはいられなかった。

《あなたは……？》

《私は、西の守護神【広目天】……、……、つて、止めた止めた。こんな堅苦しい言葉、俺の口から出すもんじゃねえよな》

やはりこの類だったか……。

だが、七海を不気味がらせていた雰囲気は一向に消えていない。なにか、存在自体にまがまがしさが漂っているような感覚を覚え始めていた。

《とりあえずあんたが今置かれてる状況を説明するぞ。

お察しの通り、この門は【あの世への入口】だ。

あんたがあの世へ逝く資格を完全に満たしてるなら、触れただけで開く》

《……、もし……、満たしてなかったら……？》

《当然満たすまで開かねえ》

あの世へ逝く資格。

それがなんなのかは解らない。

おそらくこの空間に於いてそれを理解しているのは広目天を名乗るこのパンクスしか居ないだろう。

七海は恐る恐る、扉へと手を伸ばす。

《お願い！  
開いて！》

たいした距離ではない。

目標の扉は目の前に有るといつてもよかった。

が……、

七海の不安がその距離を詰めることを躊躇させる。

《逝けなかったらどうしよう……》

じわじわと詰まっていく距離。

小柄なパンクスに見守られながら……、ゆっくり、かつ、確実に詰めていく。そして遂に……、

【運命の刻】

《開いて……！》

目を閉じて祈る七海。

……、……、……。

目の前には、門……。

その扉は固く閉ざされたままだった……。

《なんで……？》

## 2 七海編 第一部『閉ざされたあの世への入口』（後書き）

次回予告！

七海ですm（――）m

《ななみ》と読みます（^o^）

あの世に逝き損ねたわたしは【広目天】と共にその元凶を探る旅に出ます（^o^）／

次回「なんで……？」

七海編 第二部

『七海を縛るもの』

謎が謎を呼び……、複雑に絡み合う……。

……、なんのこっちゃ（^。^；）

以上、七海でした！（^o^）／

### 3 七海編 第二部『七海を縛るもの』（前書き）

予告と若干内容がずれてしまいました（^。^；）

今後も度々有るかと思いますが、大筋はずれませんので、なにとぞ  
ご容赦くださいm（）m

### 3 七海編 第二部『七海を縛るもの』

《なんで……？》

荒れ狂う風。

あの世に拒否されてしまった七海にとってそれは、あまりにも冷たく、そして、恐ろしいものとなった。

《どうしよう……。》

逝けない、あの世に、逝けない！》

その目には涙が溢れている。

《どうしよう。》

わたしずっとこのままなんて……》

【広目天】は落ち着いた物腰で、だが、ヤンキー口調で語り掛ける。

《あんた、一回現世に戻ったほうが良くねえか？》

それも一つの方法だとは思う。

だが、原因がはっきりしていない以上、行動を起こすのは時期早焦な気がする。

《なんで……？》

それは、至極妥当な質問だろう。

このパンクスならば間違い無くあの世の仕組みを知っているのだ。

なにせ、【西の守護神】なのだから。

《あんたは縛られてんだよ。

なんかがあんたを現世から離れたくねえって強く思わせてんだ。

あんた自身があの世に逝くのを心のどっかで拒んでんだよ》

《自分のせい？》

そんな自覚は全く無い。

確かに隆行に自分の死を告げられなかったこと、別れの言葉を述べられなかったことは悔やまれるが、それは、さほど気にしてはいないのだ。

他に思い当たる要素は皆無であると断言することもできる。

相変わらず突風は轟音を発てて通り抜けていた。その音はとても大きく、この広大な空間に一人で放り出された現実をリアルに伝えてくる。

騒音公害にも匹敵する劣悪な環境が、著しく思考力を低下させていく。

《……、ダメ、ダメ、逝けない、逝けないよお》

心からうるたえていた。

だが、それを嘲笑うようにどんよりと沈殿しているかのような重苦しい空気が、じわじわと自分を取り囲むのを感じとり、七海は反射的に【広目天】に目をやった。

そこには今まで見たことも無い【鬼神】がいた。

出会った時から感じていたまがましいオーラをさらに増幅させて、遺憾無く撒き散らしている。

《黙って言うこときいとけ……。》

おまえをあの世に逝かさねえと俺はポイント貰えねんだ……。

どうしても早く復活してえんだよ。

邪魔すんなよ……《》

まだ七海が生きた人間であつたなら、間違い無く足元に黄金色の海を広げていたであろうとてつもない恐怖が、心の底から沸き上がった。

《なに、わたし殺されるの……？》

霊体となっている七海には、本来なら有り得ない筈の、命を奪われる恐怖。

その、気が狂ってしまいそうな感情がますます冷静な思考力を削ぎ落としていく。

《……、……、……》

もはや、七海は思考力を失ってしまった。

《さあて、準備完了だな……。

黙らしちまえばこっちのもんだ》

広目天は呆然として座り込む七海に目を向ける。

《よし、引きずり降ろしてやるか。

あんたみてえに俺を信用しねえ奴には、こうするしかねえんだ》

なぜ信用してもらえないのか。

それは自分なりに理解しているつもりだ。

守護神にはふさわしくないまがましい雰囲気。

それは、本来ならあの世どころか、この場所に居ることすら許されない者であることの証なのだ。

《俺みてえなのは、復活するのにかなりのポイントが必要なんだよ。しかも、かなり厳しい期限付きで……。

そう、俺みてえな殺人鬼は……》

それが広目天がまがましいオーラを放つ原因であり、このような強行手段に打って出た理由だった。

復活とは転生の事を指し、あの世に逝ってから働きによってポイントが割り振られ、生前の社会貢献度によって設定された上限まで達したとき、復活する資格を得る事ができる。

本来なら無条件で地獄行きな筈の殺人犯である広目天が、あの世に逝けずとも復活の権利を得ているのは、生前の社会貢献度が犯した罪より遥かに上回っていたからであり、このようなケースは死後の世界に於いては、かなり稀な特例といえた。

《冗談じゃねえぞ。

百年以内にポイント一千万だなんて……。



無理難題にも程があるんだよ！！》

八月の一ヶ月間のみ、現世で実体化することを許される【ポイント上位二十名】ですら、年間で一万五千ポイント貯まれば両手を挙げて大喜びの世界である。

この条件はかなりの無理難題と言えるのだ。

彼は対象を現世に連れていく前に、必ず現世の様子を窺う。

ことに今回のケースのように、相手を縛るものが恋愛感情だった場合は、状況次第で悪霊や怨霊に化けてしまう可能性が多分にあるからだ。

広目天は、七海が思考力を失っているのを確認した後、両手で己の背丈と同じ程度の長方形を描く。

すると、その空間にエネルギーが集まり始め、彼が七海の前に姿を現した時と同様の収束と凝縮を始め、鏡へと変化した。

鏡には、一人の男。

おそらくこれが隆行だろう。

泣いている。

涙を拭った影響なのか、目の周りが赤く腫れている。

そこに現れた女。

それを見た広目天は、自分の目を疑った。

《麻里愛！？

なんで麻里愛がこの男に！？》

麻里愛は、隆行に一声掛けると、その場を立ち去って行った。

《なんだ!?

ダチかなんか?》

ひとまず安心だ。

もし麻里愛が隆行と付き合っていたら、まして、結婚などしていようものなら、七海は確実に化けてしまうだろう。  
なにせ、まだ死んでから三日しか経っていないのだから……。

だが、もし麻里愛が七海、隆行共通の友人であるならば、この状況にも合点がいくのだ。

《対象を化かした挙句、その怨みの対象が俺の娘だ、なんてことになったら堪んねえからな……》

麻里愛は、広目天の忘れ形見だった。

彼等にとって、最初で最後の子供だったのだ。  
母親もまた亡くなっていて、両親共通の友人だった門倉夫妻に遺言を遺して引き取ってもらったのである。

《神奈……。

絶対におまえと同じ時期に復活するからな……。

そしてまた、出会って、今度こそ結ばれて……、俺は平和に、おまえは健康に、お互い人生を満喫しようぜ……》

それは、彼の立てた目標であり、誓いでもあった。

暫く麻里愛は出てこない。

どうやらただの友人のようだ。

隆行はなおも泣き続けていた……。

七海が正気を取り戻したとき、そこには、鏡を覗き込む広目天が居た。

小刻に震えながら、食い入る様に見据えている。

気付かれないように覗いてみると、そこには、見覚えのある男が映っている。

隆行だ。

涙で顔を泣き腫らしている。

《あんなにわたしのこと、想ってくれてるんだ。

まるで時間が止まっちゃったみたいに泣き続けて……。

わたしが動かしてあげなきゃね、彼の時間を……》

七海は覚悟を決めると、広目天に向かって声をかける。

《あのお、降りして下さい、現世に》

その声に対する彼の反応は、驚き、焦り、そして、怯えているよう

だ  
っ  
た。

《な  
ん  
で  
……  
？  
》

### 3 七海編 第二部『七海を縛るもの』（後書き）

次回予告！

広目天だ！（＾o＾）／

いやあ、参った。

（-.-.;）

まさか対象の彼氏と麻里愛が関わってたとはな……（TOT）

でもただのダチみてえだし、サクッと別れを告げさせて、一件落着  
といくかあ¥（＾ー＾）／

とか思ってたらいつら……（-| -＃）

次回「なんで……？」

七海編 第三部

『堕ちてゆく海の底』

謎は……、

全て解けた！

つて、もうかよ!?  
(^。^;) )

以上、広目天だ  
¥(^ー^)/

#### 4 七海編 第三部『堕ちてゆく海の底』

《わっ、解った。

解った解った》

【広目天】は、明らかに動揺していた。

自分に女の勘の強さというものはあまりないと思うが、それでもはつきりと解る形でうるたえている。

『なんなの？

あれほど脅してまで降ろそうとしてたのに、いざ、降ろせと言ったらあのうるたえようは。

さっきの隆行の映像となんか関係があるの？』

余程【広目天】にとって都合の悪いことがあったのだろうか。

正直、自分に都合が悪くなければいい。

この【広目天】という亡霊は余りにも信用できないのだ。

彼はあわてて鏡を片付けている。

自分を取り巻く全ての状況が急展開している。

このままだと、自分自身がついていけない程、急加速するのではないかという、嫌な予感が心の底に大きくわだかまった。

風が、轟音を轟かせて二人をすり抜けていく。

広目天は取り敢えず現世に降りることに決めた。  
迷っていてもらちがあかないのだ。

《じゃあ、手え繋いで》

七海の手を強く握り込み、意識を現世へと、集中させる。

七海達は現世へと降りてきた。

七海が燃え尽きたあの交差点だ。

ここは地元では見通しが利かないことで大変有名な【死の交差点】  
として、色々な注意看板がひしめいている。

【止まれ、よく見よ】

【飛び出し注意】

といったものから

【死亡事故多発】

というものまで、その種類は実に豊富だ。

それでもひっきりなしに死亡事故が多発する。

それはひとえに、道幅の狭さに由るものだろうと七海は分析している。

それに、ミラーも信号もない。

まさに事故を起こしてくれと言わんばかりの交差点なのだ。



「マジかよ!？」

なんでこんなところにミラーの一つもねえんだよ!？」

「ご近所とか、学校とかも市に要請は出してるらしいんですけど、合併に忙しくてなかなか予算を組む暇が無いようですね」

「なんだよそれ！」

住民そっちのけかよ……」

【広目天】が、一頻り怒りをぶつけた。  
それほどあからさまに危険なのである。

「まあ、わたしの場合はこっちにも非は有るんですけど」

「なにやっただよ？」

「一時停止不履行」

あの時は隆行との未来への希望で頭がいっぱいだった。

だから……、不履行。

この交差点に足を踏み入れた時点で、自動車は目の前にいた。

突然、

迫ってくるタイヤの悲鳴。

自動車が自分を押し潰す感触。

頭を強くボンネットに打ち付けた痛み。

そして、炎の灼熱。

自分が死に際に味わったもの総てを思い出してしまった。

ここは七海が死んだ現場だ。

それも、まだ、石垣には亀裂や焦げが残ったままだった。

血痕や肉片といった七海の面影はきれいさっぱり片付けられているが、事故の面影が鮮明に残っているのだから無理もない。

「早く！」

早くここを離れましょうよ！

早く！！

わたし、おかしくなっちゃう！」

七海が騒ぎ始める。

【広目天】もそう判断したのだろう。

降りたときのように、小刻に震える七海の手を強く握り込んできた。

「イメージしろ！」

隆行とやらのことを強くイメージするんだ！」

突然の豹変に、口調もボリウムも強くなっている。

七海は必死にイメージした。

《隆行に会いたい

隆行に会いたい

隆行に会いたい》

やがて二体の亡霊は、空間の中へと消えていった。

広目天は七海を引き連れて隆行の家の前に居る。

その表札には【神林】と書かれてある。

どうやら神林隆行かんばやし たかゆきというのが隆行の正式名称らしい。

「ええと……、名前は？」

そういえばまだ訊いてなかったよな」

「えっ、佐島七海さしま ななみですけど」

七海が答える。

「七海ちゃん。

これから隆行の家に入るぞ。

覚悟はいいか」

一応確認を取る。

婚約者と言えど他人だ。

なにが起こるか判らない。

もしかすると、この短期間で麻里愛とできてしまつかも知れないのだ。

この問いは、自分への問いでもあった。

「なんの覚悟ですか？」

ここは昨日でわたし達の愛の巣になってる筈の家ですよ？」

「いいんだな？」

この時点で広目天の覚悟は決まった。  
対象の意思は絶対尊重。

それが、ポイント荒稼ぎの基本なのである。

「じゃあ……、いくぞー!!」

「はい!!」

時は、午前一時。

神林宅の寝室には、愛を確かめ合う一組の男女がいた。  
二人の名は、神林隆行と、門倉麻里愛かどくら まりあといった……。

《なんで……!?!》

空気が自分のすぐ横から乱れ始めるのを感じ取った広目天は、堪らず横を振り向く。

そこには、鬼のような形相で髪を逆立てながら二人を見つめる七海の姿があった。

広目天は神格を持つ高級霊だ。

その能力の一つとして、相手の心を読む能力がある。

七海はまだ化けてはいないようだ。  
だが、信じる心が揺らぎ始めている。  
こう繰り返しているのだ。

《なんでなんでなんでなんでなんで……》

七海の心は、(七)海(自身)の底に堕ちていった……。

#### 4 七海編 第三部『堕ちてゆく海の底』（後書き）

次回予告！

今作初登場の勇気っす（＾ｏ＾）／

本編登場前にここを出るなんて、どっいうこってしょう（？！）（？！）

さてさて、今回は俺と、マスターであるまーちゃんが彼氏の婚約者の怒りを鎮めようと大奮闘

¥（＾ー＾）／

次回「なんで……？」

麻里愛編 第一部

『お願い信じて！！』

あの世に向かって、テイク・オフ！

って、死なねえって  
( o )

以上、勇気でした  
m ( \_ \_ ) m

5 麻里愛編 第一部 『お願い信じて!』 (前書き)

長くなつてしまいました(TOT)

申し訳ありません

m ( ( m



## 5 麻里愛編 第一部 『お願い信じて!』

麻里愛は隆行や七海とは幼馴染みだった。

物心がついた時点で、もう既につるんでいた。

門倉家の子供というのが門倉夫妻の五つ子と【広目天】夫妻の五つ子の同い年の男女都合十人という、少子化が叫ばれる昨今に於いては極めて社会貢献度の高い構成であったため、いくつかのグループに分かれて行動していたこともあって、常々つるんでいた訳でもないのだが、この三人は同じグループになることが多かった。

それだけに、この二人は他人の中では最も近くにいる存在と言える。

麻里愛と、七海は親友だ。

だからこそ、

『まさかわたしを祟りやしないだろう』

と、高をくくっていたというのもあるし、明らかに隆行が彼女をパートナーとして求めてきたということもあった。

あまつさえ、麻里愛自身が隆行を恋愛対象として、諦めてはいなかった。

だから、交際を始めてしまった。

そして今、一糸纏わぬ姿で重なり合っている二人の後ろに、怒りで髪を揺らめかせている七海がいる。

麻里愛はその只ならぬ気配を察知していた。  
下腹部の筋肉が、勝手に萎縮していく。

「うお！

痛え！

なんだよなんだよ！？」

突然襲ってきた麻里愛の膣痙攣に隆行が悲鳴をあげる。

「ごめんねタツキー……。

見えないかな……？

あんたの目の前、わたしのすぐ後ろに居るの。

見えないかな、ブチ切れてるナナが……」

隆行の目が大きく見開かれる。

「ちっ……、違うんだナナ！

おまえをコケにしてる訳じゃないんだ！

違うんだ！

違っ……」

見る間に目と口から透明な体液を出し始める。

「いやああああ……！」

今度は麻里愛の悲鳴。

自分の下腹部の内側がさらさらした液体によって温められていくのを感じ取ってしまったのだ。

これは則ち、自分の体内が他人の生命活動のカスにまみれてしまったことを意味する。

温かみを伝える範囲が徐々に広がっていく。

「やだ汚い！  
汚い汚い！！」

なおも泣き喚いている麻里愛の意識に聞き馴染んだ声が直接飛んできた。

《わたしただここに突っ立ってただけなのに、まーちゃん酷い目に遭っちゃったねえ。

早く病院できれいに洗ってもらわないと死んじゃうよ？

訳の解らない病気がっ喰らっちゃうよ？》

七海が威しをかけてくる。

「嫌だ……！」

助けて殺さないで！」

《わたしはなにもしてないって。

そのお願いは、あんたか隆行の下腹にしなさいよ。

どっちかが普通になってくれれば、まーちゃんは助かるんだからさ》

命乞いをして、この有り様だ。

そして、七海の言う通りでもあった。

《死んじゃうよ？》という言葉に、なんとも言い難い恐怖が押し寄せてくる。

下腹部の奥に、液体が溜って行く感触、そして、少し前からそこに発生しだした鈍い痛みが、その言葉に現実みを与えていく。

「ごめんなさい！

ごめんなさい！

許してください！  
許してください！  
許してえー……」

麻里愛の精神も、隆行同様死に対する恐怖と嫌悪感に潰されていく。

「助けてたすけて……、ゆーちゃん助けてえ！」

絶叫と共に、それらの負の感情によって引き起こされる生理現象を一気に発現させてしまった。

勇気は成り行きを見守っていた。

本来なら、麻里愛にいい意味で取り憑いている霊として、助けてやらなければならぬのだが、対象が完全な悪霊ではないうえに、命を脅かしているものが、麻里愛や、隆行の生理現象なのでは、手も足も出せない。  
出しようがないのだ。

《畜生！

助けてったって、どうしようもねえしなあ》

ほとほと困り果てているところに、突然彼が生前にも死後にも経験したことの無い、全身を駆け抜ける小気味良い衝撃のようなものが

走るのを感じる。

そして、気が付くと、自分の体が本来の人形とは全く違う形で実体化していた。

《槍？

俺が槍になつてる？

どういうことだ？

俺はこんなもんには少しもなりたかねえぞ？》

あまりの訳の解らなさと、原因不明さに、頭の中が【？】で一杯になつてしまった。

《なんだ？

どういうこつた？》

自分の意思とは関係のない実体化なのだから、もはやマスターの意思としか考えられない。

出会つたときに、

「わたしのために働いてもらつたよ」

と言いきつていた麻里愛が、自分を使って何かしようとしているに違いないのだ。

《なにをするつもりなんだ？》

自分を槍に変えた筈の麻里愛が、全くそれを手に取る気配を示さない。

それどころか、彼女自身が勇気に変化した槍に驚きの表情を浮かべている。

どうにも次を取るべき行動が決められず、悶々としているところに、突然、いつぞや麻里愛が【クイズ ミリ〇ネア】に挑戦したときの司会者にそっくりな、しかし全く初対面な男の霊体が勇気に向かって手を伸ばしてきた。

あの司会者は麻里愛の五つ子の兄だ。

とすると、この男が彼女の父親なのだろうか。

それ程この霊体と、門倉慶太は似ていた。

手を伸ばし、手に取ろうとしたところで、男は苦痛に顔を歪めながら手を引いてしまった。

「おいあんた！

プロテクト外せ！

麻里愛じゃまだ駄目だ！

あんたを使いこなせねえんだ！」

男が言葉をかけてくる。

突然どこかから湧いて出て、この言い草。あまり良い印象は持てなかった。

「なんだてめえは！」

勇気の言葉も、自然と喧嘩腰になる。

「んなこと言ってる場合じゃ……！」

男の台詞が終わらないうちに、今度は、麻里愛達に威しをかけていた女の霊体が勇気に手を伸ばす。

そして、男もそれを阻止しようと必死に手を出してきたが、タッチの差で女が勇気に触れた。

「がつ、ぐぎつ、ぎつ、ぎつ」

言葉にならない言葉と苦痛に満ちた表情で、不快感と苛立ちを示す。

「んああああー!!」

折角男との競争に勝った女だったが、結局は、勇気を握り込むだけで白い絨毯の上に放り出してしまう。

痛みで息を切らせながら、鬼のような顔付きで麻里愛を睨み付けている。

「なかなか……、面白い事してくれるね……、まーちゃん……」

少しも面白がっていないのだということは、顔付きを見れば、一発で解る。

勇気は、この状況でもなんの手出しも出来ない自分に苛立ちを感じ始めていた。

閉まっている窓を覆い隠しているカーテンが激しくはためき始めた。

「お姉ちゃん！」

俺はあんたとやり合うつもりはねえ。

俺の意思で化けたんじゃないやねえし、まーちゃんだって、俺を見てビビってた。

どっちも無関係なんだ!」

取り敢えず自分達の現状を説明してみる。

これでどうにかなると思えないのだが、何もしないよりは、マシ

だ。

「面白い事言うわね。

あんなプロテクト掛けて霊体を拒絶してたくせに。

なんで死んだ後でこんな痛い目に遭わなきゃなんないのよ！」

四本あるベッドの足が全て激しく軋み、直ぐにへし折れた。

パン！

という銃声に似たラップ音が、静まりかえった部屋に、激しく響き始める。

「おい、まーちゃん！

まーちゃんからもきっちり説明しろ！

それと、多分まーちゃんの親父！

ボーッとしてねえでなんかしろよ！

おめーが連れて来たんだろぅが！！」

大きな爆発音を発てて、箱型テレビが砕け散った。

ラップ現象や騒霊現象により、見る見るうちに、隆行の寝室が破壊されていく。

「ナナ、ごめんね。

あたしはこんなつもり無かったの！」

「ないならなんで今ドッキングしてんのよ！

なんで今隆行の○○○○、膣痙攣で股ぐらに固定して、わたしにビビった隆行の○○○○から子宮におしっこ注ぎ込まれて、感染症になりがかってんのよ！！」



一々最もな意見だ。

そうこられるともう、麻里愛も何も言えないだろう。

これが、現場を押さえられた、いわゆる【現行犯】の弱味であると言える。

部屋の中央付近の壁に立掛けてあった書棚が、大きな音を発てて碎けた。

騒霊現象は、前より激しさを増している。

それは、より一層この女の感情が高ぶった事を意味しており、前にも増して危険な状況になってしまったことを示している。

麻里愛の説明は、マイナスの効果しか生まなかったようだ。

「ごめんねナナ！

あたしもうやんないから！

向こう二年はセックスレスを約束するから！

だからお願い！

信じてよ！

お願い、信じてえー……」

確かに、セックスレスを誓うのも、手だとは思う。

だが、ほぼ間違い無くこの女が望む回答ではない。

案の定、女の髪が激しく揺らめき、部屋中の壁が、ベコベコにへこんだ。

パパパパパアン！

ラップ音も、リボルバー式の拳銃を速射したかのような激しさとなっている。

もはや、キレてしまったといつていい状況だろう。

「……、ざけんな……。  
別れる！」

それが嫌なら、雁首揃えて……、死ね。

わたしがお前らを殺してやるよ。  
どっちか選ばせてやるからありがたく思いな……」

やはりキレていた。

殺す気満々になっている。

それでもおそらく、麻里愛は別れるとは言わないだろう。  
全面抗争の様相を呈して来そうだ。

「そんな……。」

なんで！？

なんでそんな酷いこと言うの！？

なんで……？

なんでなんで……」

麻里愛は女に疑問符を繰り返し繰り返し投げ掛けていた。

5 麻里愛編 第一部 『お願い信じて!』（後書き）

次回予告!

麻里愛です（^o^）／

ナナに「殺してやる」って言われるわ、タツキーに体内におしっこされるわ、もう最悪!

あたしはトイレじゃねえー!!（ ）

かなりキレちゃいましたが、とにかくナナに帰ってもらわないとらちがあきません（^ー^;）

説得にしくじったあたしらは、闘う姿勢を打ち出して、ナナを追い返しにかかります（TOT）

次回 「なんで……?」

麻里愛編 第二部

『受け継がれた陰陽師の能力』

世界はあたしを中心に動いている……！

えっ！？

違う！？

わーてるわよ、そんなことー！

（かなりキレてます）

（　　へ　　）

以上、麻里愛でした

（　　^o^　　）／

## 6 麻理愛編 第二部 『受け継がれる陰陽師の能力』

どうやら七海には帰ってくれるつもりは毛頭無いらしい。

それならば、どうしても追いついてしまわなければならなかった。

今はまだ実感するには至ってはいないが、状況的にはほぼ間違い無く【身体、生命の危機】なのである。

七海自身の【殺してやる】宣言、そして、下腹部の違和感。

このまま長時間この状況を放置してしまうのはあまりにも危険すぎる。

「わかった……。

あたし、別れる」

麻理愛の口から、遂にその場しのぎのでまかせが出てしまった。

勿論隆行と別れるつもりなど毛の先程もない。

この状況を放置すれば最低でも生殖機能を、最悪の場合は、生命を失ってしまうのだ。

だが……、

「あっ!？」

いだっ!

痛iiiiiiii!」

との、麻理愛の悲鳴があがるという結果しか生まなかった。

「わたしをナメてんのか?

女にそのテの嘘は通じねえって、おまえにも解るだろ!」

麻理愛の左足小指を念力でへし折りながら七海は続ける。

「身体中の骨、有り得ない向きにひん曲げるぞ!？」

はつきりしろよ!

別れるのか別れねえのか!？」

このめくらましは見抜かれてしまったらしい。

それどころか、確実に怒りに油を注いでいる。

その証拠に二人が身を乗せているダブルベッドが、隆行のの直ぐ足元から寸断されてしまった。

窓ガラスが三枚ほど、盛大な音を発てて砕け散る。

寢室を元の状態に戻すには、もはや五桁、六桁では済まないだろう。

殺される。

その予感ほ、徐々に現実味をおびてくる。

あまり、こういう方向には展開させたくなかったが、残念ながら戦うしか無さそうだ。

「ゆーちゃん、助けてえ!!」

勇気がばけてしまった槍。

それは、間違い無く自分の意思で変化したのであるということ。麻理愛は理解していたのだ。

勇気は、

「俺の意思じゃねえ」

と言っていたし、七海やパンクスは、長時間触れていることさえ出来なかった。

残る関係者は、自分だけ。

簡単な消去法である。

自分の意思の力で勇氣の状態を変えてしまったのだから、もしかすると自分の手元に呼び込むことが出来るかもしれない。

案の定、槍は麻理愛の手元に飛ぶように引き寄せられる。

まるで吸い付くような絶妙なフィット感だった。

世界最高峰の武器職人に発注しても、これ程のフィット感は出せ無いだろう。

それは、やはり麻理愛の意思により勇氣が変化したのであるということを実に物語っていた。

「面白え……。」

わたしを殺す気満々って訳か……」

七海が不敵な笑みで受けて立つ。

目覚まし時計のベルが勝手に作動し始め、振動によってひび割れ、そして、崩壊する。

それと同時に、麻理愛の左足中指も関節の可動方向とは逆に可動してしまった。

「ぐぎいつ！」

言葉にならない声で痛みを表現する。

更に続けて、麻理愛の利腕である右腕の自由を奪ったため右の鎖骨を狙ったようだが、それは未遂に終わった。

パンクスがとつさに結界を張ってくれたらしい。

勇気を手に取ったもののどうすれば良いのかどうにも扱い方が解らない麻理愛は、とにかく脅すことにした。

親友を、しかも、既に死んでしまっている親友を【また】殺してしまふことなど、どうしても考えられない。

脅して帰ってもらえるならば、それに越したことはないのだ。

「さっ……、さささす、さすさす……、刺すわよ!？」

本気だよ……!

本気……なんだよ!!」

……、迫力も、威厳も、説得力も、何も無い。

そんなことは、麻理愛自身にも解っている。

完全にしくじってしまっていた。

案の定、七海が腹を抱えて笑っている。

味方であろうと思われていたパンクスもライブでもしているかのようにはぐと頭を振り乱して笑っている。

あまつさえ、手にしている槍（勇気）でさえ、プルプルプル小刻に震えていた。

目の前に落ちている【お札】のお陰で七海は麻理愛に手を出せなくなっている。

だが、だからと言ってこのまま持久戦に持ち込むのは得策では無い。下腹部の違和感。

それが少しずつ、はっきりとした形の痛みに変わってきているのだ。

《死にたくない》



その思いが、麻理愛を鬼に変えた。

「消えろおおお！」

悲鳴のような雄叫びをあげ、槍を突き出す。

この第一撃を七海はあっさりかわしてしまった。

恐怖と痛みに手元が震えているのだ、無理もない。

だが、

麻理愛、勇気組の本領が発揮されるのは、これからだった。

《シュート！》

麻理愛がそう念じた瞬間に、右側に槍がカーブした。

ソフトボール部も野球部もどちらも経験したことのある彼女は、物体の移動に関してはとかく野球用語を使ってしまう。

シュートとは、利き手方向に水平に曲がる変化球だ。

槍は、シュートすると同時に丈もいくらか伸ばしている。

元が霊体であるがゆえに、余程非常識な要求ではない限りは応えてもらえるらしい。

じわりじわりとこの武器の使い勝手が理解出来てきた。

七海は、この第二撃もかわす。

陸上部で培ったフットワークは伊達ではないらしい。

《カーブ！》

今度は、左下へと動かす。

すばしこい相手ならば、足を殺してしまうのが一番手っ取り早い手段なのである。

今度はヒットした。

切っ先が、七海の左大腿を貫く。

「ぐあああああ！」

けたたましい悲鳴をあげながら七海は神林邸から消えた。

七海はいなくなった。

だが、それは一時的なものであり、根本的に解決したわけではない。神林邸に七海に対する結界を張ってもらうよう頼む。

「神の名のもとに、この空間に於いて邪悪なる念が存在することを禁ず……」

神林邸の四方に位置する場所にお札を貼り付けながら呪文を詠唱している。

そして、家の中央の床にマスターとなるお札を貼り付けると同時に、  
「禁——！」  
と叫んだ。

途端に、七海退治に一役かってくれた背後霊、佐野勇氣。  
彼が突然霊体に戻り、更に唸り声をあげて苦しみ始める。  
確か彼は、交際していた女性に頸動脈を切断されて殺害されたと言

っていた。

もしかすると、その女性に対する恨みがまだ残っており、それが今回【この空間に存在することを禁じる邪悪なる念】であると、この結界に判断されてしまったのかもしれない。

「結界解いてくれ！

直ぐに解いてくれ！

早く解いてくれえ！」

勇気が必死に助けを求めている。

「おまえ、怨霊だったのかよ……」

パンクスが沈痛な面持ちでマスター札を剥がす。

「はあ、ふう、痛かった……」

勇気が、息を切らせながら感想を述べる。

「ったくしゃーねーなあ……」。

麻理愛！

結界札の作り方教えるから、何でもいいから無地の紙と書く物持つてこい。

ついでに使える技もいくらか教えてやるよ」

《今あたし、動けないこと解ってないのかな》

このパンクスの観察力の低さに呆れながら、手近にあった油性マジックを手取る。

紙ではないが、無地の物には、自分が身を預けているベッドのシー

ツを代用した。

今麻理愛は膣痙攣により、隆行とドッキングしたまま身動きがとれないのだ。

シーツは今、己が垂れ流した涙やら涎やら尿やらでぐちよぐちよに汚れていたが、動けないのだからしかたがない。

こうして、パンクスの結界及び、技の伝授が始まった。

たった一度パンクスから指導を受けただけで、陰陽五行の基本的な概念をほぼ全て発現させることが出来るようになったことに一番驚いたのは麻理愛自身だった。

「なんであたし……、こんなにすんなり身に付いたんだろ？」

七海の事も気になってはいる。

親友であり、今は、己の命を狙う者でもあるのだから、無理もない。

だが、それ以上にこのパンクスの存在がとても気になってきていた。勇気が麻理愛の親父と呼んでいたこともあるし、慶太と瓜二つであることも気にかかる。

彼女は、実の父親に対して強い怒りを持っている。

そして、その怒りは心の傷として、今もなお残っている。

だから麻理愛は切り出した。  
切り出してしまったのだ。

「お父さん……、なんで……？」

6 麻理愛編 第二部 『受け継がれる陰陽師の能力』（後書き）

次回予告！

広目天だ¥（^ー^）／

どうやら麻理愛に父親なことをばれちゃったらしい（o）

ヤッペーな……、こいつら門倉夫妻から俺のこと逐一聞いてんだ  
よ……（^ー^；）

そう、俺が大量殺人犯であることも……（TOT）

ゼッテーぐじぐじ因縁つけられるぞ（、o、）

と思ってたら、案の定つけてきやがった（TOT）

あれはしゃーねーんだよ！（・ー・#）

次回「なんで……？」

麻理愛編 第三部

『受け入れられない真実』

どうしても受け入れることが出来ないとき、人はその想いをどうするのだろうか……？

知るかつ！！（- - #）

以上、広目天だ（^o^） /

## 7 麻里愛編 第三部 『受け入れられない真実』

【お父さん、なんでなの！？】

麻里愛の実の父、赤星拓真は、とある大量殺人事件の犯人であるとして、十年前に絞首刑となっただけらしい。

育ての親である門倉夫妻は、そのことを赤星系の5兄弟にはひた隠しにしてくれていたが、それも長くは続かなかった。

思春期。

大概の者は、ここを境として初めて親のルールから外れてみようとして、己自身の責任の下に自分の判断によって行動をとり始める。

麻里愛が両親の敷いたルールから初めて逸れたのは、やはりこの時期だった。

やーいやーい、おまえのとうちゃんひとごろしいー

これは、麻里愛が幼稚園児の頃から、言われてはいた。

実は、同じクラスに被害者の遺族の息子がいたのだ。

その頃は、父ちゃんとは単純に育ての親である、岩隈（門倉）竜也のことだと思っていた。

だが、中学校にあがり、理科で【遺伝の法則】なるものを学ぶに至り、

《あたしの顔、あの両親から生まれていい顔じゃないんじゃないの



！？》

という疑問を持ってしまい、自力による独自調査によってその結論に迫ろうとしたのである。

その結果得たもの。

それは、思春期の女の子にとっては、あまりにも重すぎる事実だった。

【父親は、閉ざされた吹雪の山荘で、三日間で二桁の人数を殺した殺人鬼である】

【母親は探偵で、父親をその事件の犯人として捕まえている】

【父親は裁判で死刑を宣告されたが、上告せず、しかも、投獄後、全く反省の色を見せなかったため、投獄六ヶ月で刑が執行されている】

【母親は、自分を産み落とすことが直接原因となって、この世を去っている】

知れば知るほど、両親が修羅の道を歩んで来たこと、そして、自身が真実の重みに押し潰されてしまう危機感を感じにとってしまっていた。

そして遂に……、嘘であると証明するために、当事者の口から完全否定してもらうために問い正した両親、門倉美和、岩隈（門倉）竜也の口から、出てしまったのだ。

「おまえ、どこでそれ調べて来たんや！？  
という言葉が……。」

もはや、決定打だった。

当事者。

それは、事件当日、現場に居合わせた者のことを指す。

現場にいた二人。

しかも、探偵として、母親をサポートしていたという二人の語る真実には、もはや疑問を差し挟む余地すらない。

両親のあまりにも隙の無い論理の構築に、否定するつもりで事件の真相を聞いていた麻里愛も、どうにも【赤星拓真が犯人である】と認めざるを得なくなってしまう、黙ってその場に座り込んでうなだれることしか出来ない。

残念ながら彼女には、両親、特に、父親を恨むことを生きる糧とするしか、この問題に対しての消化のしかたがみつからなかったのだ。そんな麻里愛に、やっとタイミングが巡って来たのだ。

直接父親に思いをぶつけ、しかも、犯人自身の口から事件の真相を聞く事が出来るタイミングが。

「今更どの面下げて会いにこれるのかしらね……」

まず牽制から入る。

今まで憎んでいた相手にいきなり打ち解けることなど出来る筈も無い。

とにかく麻里愛の心の中には父親に対する憎しみのブリザードが吹き荒れているのだ。

パンクスは申し訳無さそうにうなだれながら麻里愛の話を聞いている。

そして、慎重に言葉を選んでいるのだろうか、暫く考え込むように黙ったあと、ようやく言葉を発した。

「悪かった。」

でも、どうしてもあの時はああするしか無かったんだ」

言いたい事は解らなくはない。

解らなくはないが、納得出来る言葉ではない。

「そうだね。」

人殺しはみんな、自分を正当化するんだよね」

聞く耳を持ってない訳ではないが、全面的に信用することは出来ない。麻里愛は自分の中に吹き荒れるブリザードを、なおもパンクスに向けて吹き放ち続ける。

「お母さんは被害者達を直接殺さずに、社会的に抹殺する道を探してたそうじゃない？」

ただ単に、お父さんの気が短かったただけなんじゃないの？」

赤星拓真の犯行の動機は、交際していた女性を自殺に追い込まれたことに対する復讐だった。

そして、この女性の姉が麻里愛の母親、岩国神奈なのである。

どうしても神奈の思考と比べると父親の行動は、かなり短絡的であると言わざるを得ない。

「それ言われちゃ……、返す言葉がねえけど……」

と前置きした上で、パンクスは二の句を継ぐ。

「神奈の命が危なかったんだ。」

俺の腎臓、一個はもうダチにくれてやってたから、俺自身がくたばるしかあいつに自然にくれてやる手がなかったんだ」

突然放たれた脈絡のない言葉に、麻里愛はたじろいだ。

どうしても言葉を結び付けることが出来ない。

彼女は、このパンクスに人殺しの真相を訊いていた。

そして、返って来た言葉がこれだ。  
母親の命と大量殺人、この二つがどう結び付くというのか。  
どうにも想像がつかない。

「お母さんと人殺し……、なんの関係があるって言うの……？」  
嫌な予感と、聞きたくない言葉が脳裏をかすめる。

父親は何を言うつもりなのか。

麻里愛がようやくと導き出した最悪な言葉。

この男は、これを言う気なのだろうか。

パンクスがあその後続けた言葉。

それは、この言葉だった。

「あいつらを抹殺した上で神奈の命を救う手はこれしか無かったんだよ……」

麻里愛の心にブリザードに変わって、灼熱の熱風が吹き始める。  
自己正当化の極致とも言えるこの言葉。

麻里愛の一番聞きたくなかったこの言葉を聞いてしまった今、彼女  
が取るべき行動は一つしかなかった。

右手にペン、左手には、裏が無地の新聞広告。

広告の裏に紋様と、【赤星拓真】、そして、【禁】という文字を書  
き込み、そして、唱えた。

「この近辺に赤星拓真の思念体が存在することを禁ず……、禁……！」  
と……。

パンクスの顔は瞬く間に歪み、  
「ぐおおおお……」

とのうめき声をあげ暫く悶え苦しんだあと、

「畜生おお！」

と吐き捨てその場から消えた。

瘻に障る父親を追い払う事に成功して1分後、本来尿を出すための穴ではない穴から大量の尿を放つと同時に、麻里愛の膣痙攣は終わりを告げた。

だが、その尿は本来の黄透明な色ではなく、なにやら気味の悪い、どす黒い色に変色している。

下腹部が痛い。

麻里愛はどす黒い尿の主である隆行の意識の回復を待つて、婦人科で検査を受けることに決めた。

7 麻里愛編 第三部 『受け入れられない真実』（後書き）

次回予告！

麻里愛です（TOT）

なーんか嫌な予感がすんだよねー、子宮取っちゃわなきゃなんなくなるような、嫌ーな予感がさ……（TOT）

取り敢えずお母さんからあたしを拾ってくれた黒田先生に診てもらおうと思うんだけど、正直行きたくないなあ……（TOT）

次回「なんで……？」

拓真編 第一部

『責任の取り方』

敵が二体……。

お父さん敵に回したの失敗だったかな（^| ^:;）

って、次はお父さんの視点かい！？

以上、麻里愛でした

（^o^）／

## 8 拓真編 第一部 『責任の取り方』

……、疑問は抱いていたのだ。  
心配もしていた。

それなのに、なぜ確認を怠ってしまったのだろうか……。

鏡で現世を確認したとき、そこには間違い無く、麻里愛と隆行のツ  
ーショットが映し出されていたのだ。

にも関わらず、ただの友人関係であると素通りしてしまったのであ  
る。

拓真には、生前から重要なことを軽く見て素通りする癖があったが、  
今回はそれが最悪の結果をもって、出てしまったということとなっ  
た。

ルール上、任務失敗と、それをどう收拾するのかを上司である閻魔  
に報告しなければならない。

「あーあ、やだな……、あいつに失敗の報告したら、ねちねち小う  
るせえんだよなあ……」

キンキンに冷たいかき氷を食した後のようにあからさまに顔を歪め  
ながら、拓真は失敗報告を念波によって送り始める。

《……閻魔の姉ちゃん、聞こえつか？

西の門より広目天だ》

そう前置きして、報告に入る。

上の者からも、下の者からも、閻魔大王ではなくツツコミ大王と呼  
ばれている女性が現代の閻魔である。

マシンガントークで知られる、古館伊知郎氏が全身全霊を持って突  
っ込んでくるようなツツコミの神様を相手に回して、自分の不手際  
を報告しなければならないことに、そこはかとなく不安な気持ちに  
陥ってしまう。



《おい、姉ちゃんよオ、聞こえてんなら返事ぐれえせや》

さほど時間が経過していたわけではない。

それどころか、ほとんど時間は経っていない。

にも関わらず、閻魔に報告しなければならぬこと、任務に失敗したこと、そしてなにより、それによって己の遺児である麻里愛を生命、身体の危機に晒してしまったことが、時間の流れを何倍にも何十倍にも早めてしまう加速装置として、拓真を駆り立てているのだ。

閻魔からの返信は未だ無い。

一癖も二癖もある門番四人を束ねる身なのだから忙しいのは確かだろう。

だが、束ねている以上は迅速に応答してもらわねば困るのだ。

現世とあの世の境界線、幻影城。

いつ見ても薄気味の悪い空間だった。

吹き荒れる強風、果てしない荒野、そこから見えるものはもはや、

幻影城しか存在しない。

その、西門の番について早一年、これほど返信が遅れたことはないのだが……。

《お姉さま、お姉さま、わたくしの呼び掛けにお答えくださいまし》

丁寧に入ってもおそらくは無駄であろう。

それが解っているだけに、報われないボケになってしまっただろう言葉に言い知れない虚しさが込み上げてくる。

待つこと三時間あまり。

漸く御大将からのお返事がやってきた。

《あ、ごめんねタツク。

ちよっと北門のカンナが化かしちゃったもんでさ。

事後処理に追われてたんだわ》

どうやら、北の門番である神奈も仕事にしくじったらしい。

北門は、殺害被害者が来る場所だ。

基本的に残してきた者に想いを告げて来させるだけで済む西門と違って、北門の場合はもともと強い怨念を抱いて死んだ者がやって来るのだから、対象が怨霊に化けてしまう確率は格段に高いと言える。

《悪いな、閻魔の姉ちゃん……、俺も化かしちゃったわ……》

度重なる事後処理に申し訳無さが込み上げて来はしたが、ミスは報告しなければならぬ義務が有るために、どうしても言っておかなければならない。

《ああそう……、そうなの……》

いつものツツコミではなく、気の抜けた返事を返して来る閻魔に対して、うしろめたさのトルネードが吹き荒れた。

《で？

タツクはどうしたいの？》

【どうしたいのか】、と訊かれれば、もう答えは決まっている。それはもう、 $10 \times 10 = 100$ と同じレベルで決まっている。

《なんとかして、天に送りたい》

それしかない。

娘の親友だということもあるし、自分の不注意によって怨霊と化してしまったということもある。

そしてなにより、四方八方円く収まる大団円を迎えるためには、七海に成仏してもらえないのである。

《被害報告お願い。

あんたが化けたって言うてくるってことは、それなりの被害が出たってことなんですよ？》

始まった。

閻魔必殺のツツコミ攻撃である。

どうやら、手は貸してもらえそうだ。

《娘の下腹、多分子宮が感染症起こした可能性がある。》

あと、化ける取っ掛けになった娘の彼氏に物的損害が多数《感染症は気になるが、命に関わるようなものでもないだろう。隆行の物的損害に至っては、働いて買えば済む話である。》

七海にしても、麻里愛はほぼ間違い無く結界を張るだろうし、堂々と見送って見逃し三振となる打席に立ったピッチャーのごとく、全く手出しが出来ないだろう。

《俺は事件を途中で投げ出したことはねえんだ。

なんとしても佐島七海を天に還してえ》

それが揺るぎ無い拓真の答え。

そして、彼の信条でもあった。

暫くの間、ハリケーンのような強風が吹き抜ける音のみが鳴り響く。七海の昇天を妨害したことに對する叱責であるかのようなこの轟音が、時間が止まってしまったような錯覚を覚える。

時間を動かしたのは、閻魔だった。

《うーん、お願いだからヤバくなったらおとなしく、退治する方向で動いてよ？

あんたにはそれが出来る能が有るんだから》

残念ながらそれはきけない。

七海には何の責任もないのだ。

責任を取る必要があるのは、拓真なのである。

《わりいな、それは……、無理だわ。

あと、なんかあったら手を貸して貰えるか？

それからちよつと、カンナ貸して欲しいんだけど、良いか？》

この問いに對して、閻魔がこう答える。

《あー、じゃあ、北門に繋ぐから、タックが直接交渉して。

あたし、夫婦喧嘩は食いたくないのよ。

あんた達生前いろいろあったみたいだしね」と。

久しぶりの、神奈との直接対話だ。

刑務所に五つ子を全て生むという意思を神奈が一方的に告げるために面会に来て以来、20数年振りだ。

この、現世では最後となった対話も大喧嘩となったが、それ以来となる今回の対話は前回のようには折れる訳にはいかない。

《タク……、事情はだいたいアネゴから聞いたけど、わたし嫌だよ。絶対お断り》

……、もはや対話にもならなかった。

通信開始即回避である。

《おい、ちよつと待てよ!?!》

《あんたの声なんて聞きたくも無いの。じゃあ、さいなら》

「なんで……?」

拓真にはもう、九官鳥やオウムのように、この言葉を繰り返すことしか出来なかった。

## 8 拓真編 第一部 『責任の取り方』（後書き）

次回予告！！

増長天よ（＾ｏ＾）／

誰だよって思った人、手え挙げて！　　って皆かい！（＾―＾；）  
わたしは神奈よ、神奈（＾ｏ＾）／

タクは大っ嫌いなんだけど、娘の命がかかってるしねえ……（＾―  
＾；）

今回は、わたしとタクとの大バトル（ＴｏＴ）

なんで元フィアンセとこうも徹底的に解り合えないのかなあ（Ｔｏ  
Ｔ）

次回「なんで……？」

拓真編 第二部

【親としてすべき事】

人の子が最後まで頼りに出来る存在は、親しか居ない。

悪かったわね！

子にも捨てられるような親で！（TOT）（TOT）（TOT）

以上、増長天でした（TOT）

9 拓真編 第二部 『親としてすべきこと』（前書き）

済みません、プライベートが慌ただしく、気付いたらレッドゾーンに入ってしまった（TOT）

今後このようなことがないように気を付けます

m ( — ) m

## 9 拓真編 第二部 『親としてすべきこと』

拓真の中で、視界ゼロの強烈なブリザードが吹き荒れる。

まさか断られるとは思ひもなかったのだ。自分一人の能でどうにかするか、もう一度神奈に頭を下げるか、悩み所である。

《取り敢えず様子でも見てみつか》

左手で長方形を描き、映現鏡を呼び出す。

そこには、旧友である黒田桜子医師の診察を受けている麻里愛の姿が有った。

何やら、長い髪をバサバサに振り乱しながら大口を開けて喚き散らしているようだ。

音声を伝えてこないのがこの鏡最大の欠点なのだが、今回は何があったのか手に取るように解る。

ほぼ間違い無く感染症にかかった子宮を切除しなければならないという告知を受けたのだろう。

《完璧に……嫌われるな》

もはや、決定打だった。

次いで被写体を七海に切り替える。



高い石垣とブロック塀で構成されたミラーの無い丁字路。  
いつぞや七海と共に訪れた、死の交差点だった。  
その突き当たり、自動車が七海をひき潰した事故現場に一人佇んで  
いる。

間違い無く怒っている。

塀から覗く樹樹は微動だにしていないにも関わらず七海の髪がユラ  
ユラと揺らめいていた。

明らかに何かをやらかす雰囲気をはしひしとかもし出している七海  
に対し、まずコンタクトを試みる。

《七海、広目天だけ》

プツン……。

一方的に回線を遮断されてしまった。  
声も聞きたくないということらしい。  
あくまでも自力解決を望むなら、もはや消滅させるしかないという  
レベルに到達していた。

《しゃーなーな、やるか……》

何かをやらかされてからでは遅い。

《カンナ、頼むから話を聞いてくれ……。

今、麻里愛がやべえんだよ、俺とおまえの娘だよ。

俺もう完璧に嫌われてて、結界張られて閉め出されたんだ。

おまえに手え貸してもらいてえんだよ》

自分のミスによって招いた緊急事態である。

今更頼めた義理でもないのだが、丸く収めるためには、どうしても  
第三者の介入を必要としていた。

《あのね、汚れたお尻人前で捲ったって、普通はキツナイって言われるだけで絶対に拭いてなんてもらえないんだよ？

なんでわたしに向かって捲るのよ》

言われた通りだった。

確かに頼める義理ではない。

だが、神奈としても、麻里愛に対して母親としての責任を放棄した罪はある筈だ。

産み落として直ぐに他界するというのは、産まれてきた側にとっては産まれて直ぐ捨てられたも同然なのである。

いくら事後を親友夫婦に遺言で託していたとはいえ、許されることではない。

《確かに俺はケツ拭いてねえってことも、それをおまえに捲ってることも認めるよ。

けどよ、おまえだってまだ拭いてねえんじゃないのか？

七海は俺がどうにかすつから、お互いちゃんと拭いちまおうぜ》

麻里愛含む五人の子供達に何もしてやれなかった責任を一番感じているのは、多分神奈だろう。

周りの者全員から無理だ、堕ろせと反対されたのを聞かずに、かたくなに五つ子を産み切った結果がこのざまなのである。

腎臓に死の病を患っている体でそんなことをすればひとたまりもないことぐらいは、自分でも解っていた筈だ。

《解ったよ。

わたしの担当は、麻里愛だけでいいんだね？》

なるほど、意地でも連携しないつもりらしい。

だからこそ敢えて【だけ】と仕事の範囲を限定してきたのだろう。それでもいい。

神奈の力を借りられるのなら、この条件でも交渉は成功と言える。

9 拓真編 第二部 『親としてすべきこと』（後書き）

次回予告！

七海です（-| -#）

マジ頭きた（-| -#）

わたし死んでまだ二日も経ってないんだよ！？

なのに何あいつら、すっ裸で乳繰り合ってるのさ（-| -#）（-  
| -#）（-| -#）

殺す！

絶対殺す！

次回「なんで……？」

七海編 第四部

『天に還るために』

狙った獲物は、絶対に逃さん！

ああ！？

そんな事しちゃあの世に逝けないだあ！？

いいんだよ、わたし怨霊でも成仏出来る手を知ってただから！

以上、七海でした（- - #）

## 10 七海編第四部 『天に還るために』

鬱蒼と樹が生い茂る庭を取り囲む、ブロック坪。正面に佇む、高い石垣。そのすぐ側には電柱があり、【注意！ 死亡事故多発】という立て札がかかっている。

### 死の交差点。

そこは、死の名所であるだけに地縛霊の溜り場となっっている。その数は実に、四人にも上った。元々多いだろうことは予測してはいたが、実際に目の当たりにすると、いかにここで多くの自動車の人が命を喰らい潰してきたかが手に取るように判る。

今日から、七海もこの地縛霊達の仲間となる。そのためにこの、忌まわしい交差点に舞い戻ってきたのである。

怨霊と化しても成仏できる、つまり、あの城を完全にスルーして一気にあの世へと逝くことが出来る奥の手を実行するにはどうしてもここに来る必要があったのだ。

同じ死に方をした者を七人、更に、人柱を一人用意すれば儀式は完了、いわゆる七人御先である。残り三人。七海の狙いは当然麻里愛と隆行を巻き込むこと。しかも、なるだけ麻里愛を人柱にしたい。あの女が隆行をたぶらかしたに決まっているのだ。

そのために七海がまずしなければならないことは、ここの地縛霊達を仲間に引き込むことである。七人御先を成功させる最大のポイントは、志を同じくすることなのだ。スポーツの団体競技で全員が勝ちたいと思わなければ勝てないのと同じようなものである。

最初のターゲットを七海がひき潰された石垣の直ぐ脇で蹲って震え続けている、ぱつと見て十代後半ぐらいの茶髪の女の子に絞って

接触を試みた。

「こんにちは。どうしたの？」

とにかく彼女には、事故の危険はもう去ったのだということを理解してもらわなければならぬ。そして、それによって自分がもう、生きた人間ではなくなったのだということも、受け入れてもらわなければならなかった。

女の子はなんの反応も示さず、只只打ち震えているだけ。どうにも長期戦に突入しそうな気配が満々だ。

「あのさ、もう車、行っちゃったよ。もう車いないから、顔上げても大丈夫だよ」

まず話を聞いてもらえなければ話にもならない。ここは、どうにかおちつかせることに専念しなければ。それにしても……、怯え方が異常だ。七海自身事故間際には、恐怖で身動きがとれなくなってしまったが、せいぜいその程度である。

この様な体勢では、運転手の顔も確認できないのではないだろうか。いや、意図的に顔を見るのを避けようとすらしている体勢であると言える。

……、もしや……。

「あなた、事故死じゃなくて誰かにここで、普通に殺されたわね？」  
確信は無かったが、もしこれが正解だったなら、彼女を御先に引き込むことが出来ず、余計な犠を一人増やしてしまわなければならなくなる。できることなら、否定してほしい。外れていてほしい。只でさえ、余計な犠を一人作らなければならぬことが確定していて、気分が滅入っているのに。

周りの木々が、風にざわめいている。七海の気持もまた、それに比例して俄にざわめき立ち始めた。七人御先の成否は、もはやこの少女一人にかかっていた。

10 七海編第四部 『天に還るために』（後書き）

次回予告!!

七海です（＾o＾）／

ようやくと女の子とのコンタクトに成功すんだけどさ、ここにまで  
奴らの手が延びてきちゃったのよ、まったくム力つく（・・＃）

次回

「なんで……？」

七海編 第五部

『計画破綻？』

どうして世の中ってこうも思い通りに進まんのかね……（TOT）

いやいや、ここで諦めるようじゃあの世になんて逝けないわね  
o ( ^ - ^ ) o

以上、七海でした ( ^ o ^ ) /



## 11 七海編第五部 『計画破綻?』

元々人数が足りない。そんなことは初めから判っていた。この状況で出来るだけ要らん犠牲は避けたい、こう願うのは、調子が良いすぎるのだろうか。

蹲って震える、茶髪少女。この少女はどうも殺人被害者であるらしいのだ。

モタモタしていると、奴が結界を張りに来る。奴が来る前にここにいる四人とかたをつけなければならない。

「ひかれる!」

少女からのファーストコンタクトはこの言葉だった。気持ちが焦って読み違えたのか、どうやら彼女はちゃんと、事故で亡くなってくれていたらしい。

「お兄ちゃんが……、あたしをひき殺してお母さんの遺産を独り占めする気らしいの!」

……、微妙だ。実に微妙だ。事故で亡くなったのは確かなようだがそこには明確な殺意が存在する。殺意が認められる以上、これは、殺人事件なのである。

「はい、ごめんね、ちよつとどいてね」

突然目の前に一人の大柄な霊体があらわれた。長い髪を頭のでっぺんから二本結わえた物珍しいツインテイル、200センチを超えているのではないかと思われる背丈、それでいて、恋愛シミュレーションゲームからでも抜け出てきたかのような顔立ち。忘れる筈もない。麻里愛の母親、岩国神奈だ。憎らしい程に麻里愛にそっくりである。

神奈は何やら少女と話し込んでいる。少女の表情が瞬く間に晴れやかになっていった。

そこはかとなない嫌な予感。少女がこの女に導かれて、成仏してし

まうのではないかという酷く嫌な予感がよぎる。

### 【計画破綻】

要らない犠牲者の増加を余儀なくされてしまうのだろうか。

少女はついに、神奈と手を取り合って何処かへと消えてしまった。

【成仏】。必要な犠牲者の数は、二人。

不幸は連続して襲いかかる。今度は事故死者担当である広目天が他の連中を拐いに来たのである。

「よう、久し振りだなお前ら」

陽気な素振りと妖気な笑顔で言葉を投げ掛けてくる。どんなに陽気に振る舞っても、どこか、ドス黒い雰囲気があるのは相変わらずのようだ。

七海の髪が逆立つ。これ以上御前のメンバーを減らされてはたまらない。

「どうだ、そろそろ暇になったろ？ あの世界に逝きたくないやつ、いつでも連れてくぞ」

先手を打たなければ……。知的活動を営んでいる以上、どうしても負けるわけにはいかない戦いにもつれ込むことがある。今回もそのうちの一つであるだろう。【先手必勝】この戦いはルールというルールが敷かれているスポーツではない。ルールが存在しない戦いにおいての先手は、まさに必勝法なのである。

「あのね、あいつに付いていたら、あいつみたいに働き詰になっちゃうんだよ！？ みんな、死んだ後でまで働くなんて、やじゃないの！？」

そう、七人御前としてあの世へと渡れば、これはもう、入国手続きをせずに不法入国するようなものである。いくらあの世といえども、そんな連中までは管理しきれないだろう。世の中悪が栄えた例しはないと言うが、侵略者が世界に君臨している現状を見るに、必

ずしも栄えないとはいいい切れなない。つまり、【勝てば官軍】なのである。

それに対して広目天は、

「七海……、おまえ、不法入国だと認めていながらなんのペナルティーもねえと思ってるのかよ」

と切り返してきた。なぜか考えていることが読まれている。もしかするとその手の能力があるのかもしれない。しかもなにやら、隠し球を持っていそうな雰囲気は満々だ。

切り返す、これしか手は無さそうだ。

「大丈夫。生きた地球人より死んだ日本人の方が数が多いんだから。絶対にバレやしないって！」

とにかく管理されなければ問題は無いことを強調しておく。管理さえされなければ、法律の対象の外に居ることになるのだ。

「おまえ、全くあの世のシステム理解してねえのな」

確かに知らない。人間が死ぬ回数は一回こっきりなのだから、知っている訳がない。借りて来た猫の様に押し黙っている七海の様子を察したのか、ここぞとばかりに広目天がたたみかけてくる。

「正直、出来るさ。不法入国は出来るんだよ。でもな、あの世だって地獄なんだぜ？」

あの世が地獄。地獄もちゃんと存在しているにも関わらず、地獄。天国や極楽浄土なるものなど、存在しないと言うことか。

思考の狭間に、またしても広目天の妨害工作が割り込んできた。

「一言でまとめりゃ、働き地獄だ。そしてそれは、どんな状況で逝ったとしても変わらねえ。ウロウロしてるのを見付かったら、必ず手伝いに駆り出される」

要するに、否応無く仕事しなければならぬと言うことなのだろうか。

「なに言ってるのよ、みんなよく考えてみな？ 手伝うつてことは、強制じゃ無いんだから、そんな要請は断っちゃいいじゃん」

これが一番妥当な切り返しだろう。生きた人間が働かねばならな

いの、食費や家賃を確保するためである。霊体は、食事などせずとも死ぬことはないのだから、働くことになんのメリットも無い。この思考にも、広目天はつけ込んできた。この男、余程人の挙げ脚を取るのがお好きらしい。

「霊体にだって死はあるんだぜ。ただ、誰も死とは言わねえだけだ。霊体死ねば、その存在自体が消えて無くなる。」

広目天は、突然脈絡の無い話を始めた。確かに食わなくても死なない、七海はそう思いはしていたが、議題は決してそこではないのだ。この切り返しは明らかにベクトルがずれている。

「あはははっ！ なにあんた、この勝負投げちゃうわけ？ なにいきなり言うに事欠いて訳の判らんこと言い出すのよ」

### 《勝った！》

正直そう思った。これは、本当に言うに事欠いて口をついた、出任せ気味の苦肉の策なのだと。

だが、そうではなかったらしい。決してそうではなかったのだ。

11 七海編第五部 『計画破綻?』（後書き）

次回予告!!

広目天だ（^o^）／

会った時から思ってたんだけど、七海ってほんとおめでたい女だよ  
な……（^―^；）

まあ死んだことねえやつがあの子のシステムを知らんのはある意味  
しゃーねえとは思っけど  
（^―^；）

あの麻里愛殺し計画はなんとか阻止できそうだな  
o（^－^）o

次回 「なんで……？」

七海編 第六部

『完全なる破綻』

今は、今出来ることに全力を尽すだけだo（^－^）o

それでも報われねえのがこの世のシステムだ……なんて突っ込みは  
無しだぜ？（＾―＾；）

以上、広目天だ（＾o＾）／

## 12 七海編第六部 『完全なる破綻』

八人まで、二人足りない。しかも、残る三人を広目天が纏めて成仏させにしゃしゃり出てきた。このままでは、完璧に計画倒れになってしまう。

あの世へと入国手続きをせずに逝くことが出来る邪法【七人御前】。死亡事故多発地帯には、必ずといっていいほど存在している怨霊の集合体だ。

只でさえ狭い視界を更に狭めてくれる、あまり手入れの行き届いていないはた迷惑な庭木がざわざわとざわめきだっている。何かの非常警報であるかのように、風も無いのにざわざわと激しく泣き喚いていた。

そんな中勃発してしまった広目天との論争に、七海はどうにか勝てそうだという手応えを感じ取っていた。広目天が明らかに論点のズレている反論を、苦し紛れに繰り出してきたのである。

「あーそう、お化けも死んじゃうのー。へえ、怖い。ああ怖い怖い。あたしも気をつけなきゃ」

すっかり勝った気になって馬鹿にしきった返事を返している。態度には出していないものの、眉間にシワを寄せ、唇の両端を極端に吊り上げた、般若の如き表情からも勝ち誇っていることが窺える。

「ふん、勝った気になってご満悦かよ、おめでたいこつたな」

言い返す広目天もまた、鼻で笑う余裕を見せる勝ち誇った物言いで反論を繰り出しはじめた。

「あの世は、サービスしねえ。徹底的に不法入国者には、公共サービスを提供しねえのよ」

七海の眉が、ピクリと反応する。【公共サービス】。既に死んでいる者に対して有効なサービスなど、もはや【転生】【黄泉返り】【権力】の三つぐらいしか思い浮かばないのだ。

「正解だ。あの世が提供するサービスは【功労点の配布】だ。これが指定量まで貯まれば転生できるし、元旦から七月末までの間で稼いだ点数の多い20体が、盆の期間に誰からの干渉も受けない完全オフをもらう権利を得る」

ここまでは問題無い。七海の吊り上がった口元は、まだ彼女に精神的余裕が残っていることを示している。

「おまえらにとっての問題は、こっからだぞ」

ここで広目天の口元も吊り上がった。七海が微かに覚えた不安に反応したのか、ここに来てさらに増して来た広目天の妖しさに反応したのか、思うがままに育ち放題の庭木が風も無いのに激しく揺れている。

「七海の言った通り、生きてる地球人より死んでる日本人の方が多いからな。言うまでもなくあの世は人口過密だ」

それはそうだろう。そんなことは、言われなくても想像が付く。「だから、ここ数年あの世はなあ、不法入国者の締め出しにかかってんだよ。さつき挙げたオフを競い合う半年プラス一ヶ月の間に、一点も稼げてないグータラ野郎は纏めて消滅してもらうことになったのさ」

七海の顔から始めて余裕の色が消し飛んだ。どうやら広目天の言わんとすることを、ほぼ完璧に把握出来たらしい。

「御名答。七海、おまえの察した通り御前はサービス受けらんねえんだから、必然的に8月1日が命日ってことになんのよ」

漸く広目天による、ロールプレイングゲームの始めに出て来る操作説明のような、無駄に長いあの世の解説は終了を迎えた。

そう、

七海以外の全員の成仏という、最悪の結果を以って。

「なんで……」

死の交差点に一人ポツンと、へたり込むような体勢で取り残され



てしまった七海は、涙を流しながらその言葉を繰り返していた。

佐島七海として一度も死んだことが無かったという至極当たり前なことに起因する、致命的な情報の欠落。その理不尽極まる敗因に、七海は只々座って泣いていることしか出来ずにいた。

## 12 七海編第六部 『完全なる破綻』（後書き）

突然で申し訳ありません、今回で、【次回予告】止めようと思いますm（――）m

ここ数回、スランプやら本職の忙しさやらでやたら更新が不定期になってしまっているため、意味をなさなくなってしまうような気がするんです（TOT）

重ね重ね、不定期更新申し訳ありませんm（――）m

### 13 神奈編第一部 『思考』

拓真と約束を取り交わしたとは言え、神奈はまだ動く気にはなれなかった。自分にそんな意志は無かったにしろ、結果的に息子二人、娘三人を産んだそばから捨ててしまったのである。とても合わせる顔が無い。

「後悔しないために産んだのに……。産まなきゃ良かったのかな」  
そんな考えさえ持つてしまう。拭い切ることのできない罪悪感。  
産めば死ぬ、それが解り切っている状況での出産。そこから芽生えた後ろめたさは今や大木へと成長していた。

今、一体の少女を無事に成仏させた後、自分が受付を任されている幻影城北門に帰還して今後の身の振り方について考えている。麻里愛が既に死んでしまっていたならまだ手の打ちようもあるが、生きた人間である以上本来あの世はノータッチの姿勢を貫かねばならないのだ。生者の運命を死者が変えてしまふ、今も昔もそれは現世とあの世の狭間における最大の禁忌なのである。

もしこの騒ぎで、麻里愛が死ぬ運命にあつたとしたら。それなのに、それを神奈が助けてしまったとしたら。紛れも無くこの禁忌に触れてしまうこととなる。その先に待っているものは……、

#### 《消滅》

自分の存在が果てる、その恐怖を実感しはじめたとき、元々暗い闇に包まれていた北門周辺の景色は更に深い闇へと沈んでしまった。

北門広場。広場というお気楽な響きにはあまりにも似つかわしくない、どす黒い闇。そして、荒んだ景色。幻影城の屋外の景色は自分が置かれている心情を映し出すといわれているが、今の今までこれほど荒んで見えたことは無かった。

現世での麻里愛の様子を確認するため、映し世の鏡を作り出す。そこに映り込んだ麻里愛は手術台に横たわり、下腹部に大きな切れ込みを入れられていた。

白衣を纏う女の手には見るも無残な悍ましい色彩の肉塊が乗っている。形状で辛うじてそれと判る物体、子宮。一目で腐敗していると判断できた。

「子供、産めなくなっちゃったんだ……」

かつて神奈が味わった、産めば死ぬという辛さとは全く逆の辛さ、苦しみ。それがどれほどの精神的苦痛を伴うものなのかは、現世を女として生きた神奈には痛いほど良く解る。

たとえ亡くなった友人への礼を欠いたツケであるとはいえ、これはあまりにも酷い仕打ちだ。

神奈は決る。助けよう、支えになろうと。

北門広場の風景も、いくらか明るさを取り戻している。麻里愛を支えていこうと決めたことで、いくらか気持ち晴れたのだらう。まずはどう接触するか。この時に与えるファーストインパクトによつて、ミッシヨンの成否が左右されるのだ。間違つても拓真のように、結界によつて締め出されるような愚を起こしてはならない。今はまだ早い。もう少し様子を見なければ、取り入る取っ掛けが少なすぎた。

「タクはどうする気なのかな」

あくまでも主導権は拓真である。これは彼が起こした騒ぎであり、神奈はその尻拭いのために駆り出されてしまっただけなのだ。先刻は勢いで連携する気はないと言い張ってしまったが、拓真の動きや狙いが解らなければ、神奈もまた身動きが取りずらいのだというこ

とに、今やっと気付くことができた。

鏡の対象を麻里愛から拓真へと切り替えて、確認する。何やら物騒な注意看板が並ぶ、見通しの悪い丁字路で、ショートカットの女性と揉めているようだ。

あれが拓真が怨霊に化かしてしまった今回の対象なのだろうか。現場にはその二体以外に更に三体の霊も存在している。

それにしても、この全員に見覚えがあるのはなぜだろう。このミッションにおいて、そんなことはどうだっていいことなのだろうが、どうしても気になってしまった。

あのショートカットの女性から、何やらとんでもない怨念を向けられたような記憶があるのだ。

「あれは確か、どつかの丁字路で……、遺産相続のゴタゴタで轢き殺されちゃった女の子を……」

ここまで思い返したところで、漸く全てを理解した。今写っている現場がその少女がいた丁字路であること、そして、少女の説得に入る前にあのショートカットの女性が何やら交渉していたことを。

「あの娘が七海って娘なの？」

間違はなくあの女性は神奈に対して、去り際に強い怨念をぶつけている。今神奈は殺されて死んだ霊を成仏させる仕事をしているが、生前はそれ以上の修羅道を歩んできた。

犯罪者を白日の元に曝す探偵業。そして、ライバルとの蹴落とし合戦を生業とする芸能人。そのどちらもが、常々戦いの日々なのだ。そんな暮らしをしてきた神奈が、怨念を他の感情と紛う筈はない。

《あれは怨念だ》

神奈はそう結論付け、拓真の様子を見る。どうやら拓真は、七海以外の霊をまとめて成仏させることを狙ったらしい。その狙い通り、ショートカットの七海以外の連中が拓真と共にその場を離れていく。そして拓真は西門前へと移動し、連中を片っ端からあの世へと送った。

「相変わらずやることが大掛かりだね」

恋人の、いかにも彼らしいやり口を前にして、思わず微笑みが漏れてしまった。

## 14 神奈編第二部 『麻里愛守備隊結成』

神奈は映し世の鏡で拓真の様子を確認している。拓真は、三体の地縛霊を纏めて成仏させた後、映し世の鏡を作り始める。

いったいどこに繋いでいるのだろうか。もしここに繋いだのなら、この薄ら不気味な景色の中のどこがしかに変化が現れるはずなのだが。

薄暗く覆いかぶさる雲の海には、何の変化も無い。

ジワジワと息吹の色が芽吹き始めた雑木林にも、特段変化はない。カラカラに渴いて、干からびてしまっている大地……、には、何やら微妙に歪んでモヤモヤと蠢いている地点があった。どうやら間違いない。拓真の鏡は、ここに繋がっているらしい。神奈が余りにもあからさまに連携の意志が無いことを表明したため、隠れてこっそり連動しようとしてもいうのだろう。

《ちよつとあんたねえ、いくらわたしに連携する気はねえって言われたからって、陰でこそこそやってんじゃねーわよ！ もっとビシツとしなさいよ、キンタマ引っ付いてんでしょ！？》

どぎつい激を飛ばして連携してやっても構わんとの意志を示す。これを受け取れるかどうかは拓真次第だ。

返事を待つ。昔からかけられた言葉の意味を自分なりにじっくり噛み砕いてから返事をする節のある拓真だ。おそらく直ぐに返事は来ないだろう。

神奈はそう踏んでいたが、意外にもあっさりと返事が来た。

《フリイ、恩に着るよ》

理解したらしい。昔より拓真の推理に切れが増していたことに、師である神奈はひっそりと喜んでいた。

雲の切れ目から日の光が落ちはじめた北門広場から、幻影城北門へと引き返した神奈は門前の階段に座り込む。

久々に見る太陽の輝きは、とても晴れやかな気分にくれる。

《で、わたしはどう動けばいいの。どうにも麻里愛に取り付く島が無いんだけどさ?》

実際に、今動くのは良くない気がした。少なくとも好かれてはいない筈なのだ。精神的にかなり参っている時期に、余り好きではない者の訪問を受ける。普通なら、にべもなく追いつ返して結界を張ってしまうだろう。

これには拓真も返答に困っているようだ。両親ともに嫌われている、その有り得ない程に厳しい現実の壁が、二体の前に大きく立ちはだかつてしまった。

《あの背後霊にでも執り成してもらうか……》

背後霊とはまた、ぞつとしない話だが、いったい何が取り憑いているというのだろう。そして、自分の娘にそんな得体の知れない者が憑依しているというのに、この男はいったい何をしているのだろうか。

《なんなわけ? その背後霊って》

《たぶん守護霊だと思っただけど……、怨霊締め出しの結界に締め出されそうになったんだよな、そいつ》

拓真の結界に引掛かる。それは、その時点で対象がなんがしかの形で怨霊であることを示している。出来ることならそのような危険な霊体とは縁を切ってもらいたいものだが。

取り敢えず、再度映し世の鏡に麻里愛の姿を映してみる。そこには、ベッドを殴り付けて悔しがる彼女の姿があった。その直ぐ横には、見覚えのある男が付き添っている。確か、麻里愛が幼い頃、よく一緒に遊んでいた男の子……、【隆行くん】だっただろうか。

《そっか、あの二人付き合ってたんだ》

懐かしい顔を見て少しホツとする。そこで少し、気になることに気付いた。知っている。確かに知っているのだ、あの七海という女性を神奈は間違い無く知っているのである。

いつもこの二人と一緒にいるんでいた女の子。面差しが一致する。



これはもう、確定だろう。

神奈は、北門守備部隊の総長である。勿論、それなりの数の部下を任されていた。口に、輪にした親指と人差し指をくわえて、一息に息を吹き出す。

北の守護神増長天様の唇が激しくふるえ、『ピー』という甲高い音を発すると同時に、彼女の下に入っている低級霊達がバタバタと集まってくる。

拓真と同じ轍は踏まない。自分が駄目なら、自分の息がかかった誰かに托すことにしよう。

集まった部下達に映し世の鏡を見せて、指示を出す。

《少しの間、この女の子を悪霊からガードしてもらいたい。誰か頼まれてくれる人居る？》

十体居るうち、四人が名乗りを上げた。こうして、麻里愛守備隊側は全ての準備を整えたのである。後は、拓真が七海を成仏させるか消滅させるのを待つのみだ。

## 15 神奈編第三部 『麻里愛守備隊始動』

神奈によって急遽結成された【麻里愛守備隊】。隊長に任命されたのは、未だ神格は持っていないものの中級霊に値する幸長雅章。彼は、自分を殺した犯人を神奈に捕まえてもらったという経緯を持つ。

《よっしゃ、カン姐のためだ！ 一肌脱ぐぞ、おまえら！》

雅章の言うおまえら、他の三人もまた、神奈によって怨みの鎖を断ち切ってもらった者達ばかりだ。否が応にもこの場が盛り上がった。

《勿論つすよアニキ！ あんなに綺麗な麻里愛ちゃんをこんな歳で死なせやしません！》

中には神奈のためではなく、麻里愛自身に興味を持っている者も居るようだが、今回の件においてはそのほうがプラスに働いてくれることも確かである。取り敢えずは心配なさそうだ。

神奈は頭頂部から垂れた左側の尻尾を左手で揉みくちやにしながら、必要以上にやる気になっている守備隊に、

《あのねえ……。気合い入ってるのはありがたいけど、変に突っ走って空回りしないでよ？》

と、取り敢えず釘を刺しておく。やる気だけが先走って拓真のように締め出されてしまっただけでは、どうにもならないのだ。とはいえ、空模様がまだ穏やかな所を見ると、さほど気にしてもいないようだが。

《解ってますよ姐御。で？ 姐御はどういう戦術を考えてるんで？》

《ごめん、丸投げさせてもらっわ》

神奈はとても無責任な答えを返す。とはいえ、勿論そこには自分が絡むと失敗する可能性が高いという打算があるのだが。

《了解。じゃあ、早速作戦立ててきますわ》

そうと決まれば完全に神奈を現場から締め出すつもりのようなのだ。

今まで晴れていた空が、またしても曇天模様に変わった。葉が繁り、翠の森となった木々が、再度吹き荒れ始めた強風にザワザワと騒ぎ立てている。

《お願いだからしくじったりしないでよ？》

どうしても信用できない気持ちは、なおも北門広場に嵐を巻き起こしている。神奈の心配をよそに、麻里愛守備隊は作戦会議へと散っていった。

麻里愛守備隊はただ今作戦会議中だ。自分らが神奈の命によってサポートしに来たのだということは、なにがあっても隠し通さねばならない。幸長隊長は、ひとつひとつ順序立てて決定していく慎重策を提唱し、全員がそれに従う形で会議自体のベクトルが決定する。最初の行動、それは言うまでもなく、麻里愛との接触方法である。《まず、姿を見せるか、極秘裏に護衛するか、どっちがいいと思う》ここでしくじると全てが水泡に帰す。協議の中でも、一番時間をかけねばならない議題だろう。

《あたしは出ないほうがいいと思うけどね。へんに出てったらヤバいのと勘違いされ兼ねないし》

江戸時代からずっと増長天配下であるらしい壁長千鶴が妥当な意見を述べながら、日本髪を解いてツインテイルに結い直す。お固い雰囲気の有った佇まいが、みるみる今時の若者へと豹変した。

《相変わらずちーちゃんは髪だけでガラッと変わっちゃうねえ。で、他は？》

幸長は千鶴に感嘆しつつ、リーゼント気味のオールバックを他のメンバーへと向ける。

《とがチンはどうよ？》

そして、富樫達人へと話題を振った。

《正直、隠れてても無駄だと思うっすけどね。相手が全く零感だっ  
てんならまだしも、モロ見えちゃう訳でしょ？　こそこそ付け回し  
てることのほうがよっぽど疑いを招くと思うっすけど？》

話題を振られた達人は、毛先を弄びまくった黄色いツンツンのパ  
ンクヘアを手持ち無沙汰気味に更に弄びながら、倦怠感漲る口調で  
適当に聞き流してますという雰囲気満々に漂わせる答えを返す。

《TAKUさんとKANNAさんの娘で、しかもあんなに綺麗な麻  
里愛ちゃんなんだから、言われてるほど頭悪くもないと思うんすけ  
ど？》

典型的なパンクスであるためか、ミュージシャンだった拓真と神  
奈を知っているようだ。そして、麻里愛が美女であることもまた事  
実である。が。

《広目天と姐御の娘だし、確かに美女だ。それは認めるけどな、ど  
う考えても関係ねえだろ！　全く！》

言っていることは正論なのだが、どうしてもその根拠が気に入ら  
ない。少し感情的な対応となってしまった。

《ったくしゃーねーなあ。キャノン、おまえはどうよ？》

微妙な苦笑いを浮かべながら、真向かいに陣取る坊主頭に話を振  
る。本名は瀬間高敏。高校時代拓真と並び賞されていた超高校級右  
腕投手だったが、最後の夏を前にその能力を嫉んでいたチームメイ  
トに殺害されてしまったといういきさつを持つ。勿論彼も神奈に犯  
人を捕まえてもらい、それによって成仏している。

《マーさんって確か十兄弟の末っ子だったよな？　なら、兄弟の誰  
かの守護霊だって名乗ったときゃいんじゃない？》

《要するにキャノンも出たほうがいいって考えなんだな？》

雅章自身も隠れ通すのは無理だと見ていた。陰陽師赤星拓真の遺

伝子を色濃く受け継ぎ、しかもその除霊能力を直伝された、いわゆる【免許皆伝】の存在である。どう足掻いても発見されずに張り付いていることなど出来る筈が無い。

《三対一だけど、ちーちゃん妥協できるか？》

《出るってんなら出てもいいけどさ……。あたしゃ噓つき通すことのほうが難しいと思うけどね》

千鶴の意志変更によって、守備隊の方針は【姿を晒す】方向に決定された。そして会議は次の議題へと進んでいく。

## 16 守備隊編第一部 『接触方針』（前書き）

登場人物（？）がかなり増えてきたので、纏めてみました（^^）

かどくら まりあ  
門倉麻里愛

通称【まーちゃん】

本編主人公。とあるアクシデントにより、佐野勇気という背後霊を飼っている。

かんばやし たかゆき  
神林隆行

通称【タッキー】

婚約者だった佐島七海が事故死して三日と経っていないにも拘わらず、麻里愛と乳くり合っている現場を七海に押さえられ、麻里愛共々崇られる羽目になってしまった。

あかほし たくま  
赤星拓真

通称【タク、タック、TAKU】

あの世への入口【幻影城西門】の受付及び、事故死者の水先案内人【広目天】。

事故死してやって来た七海を、手違いで怨霊に化かしてしまった犯人。生前婚約者だった神奈と共に、七海成仏作戦を展開している。麻里愛の実父。

いわくに かなな  
岩国神奈

通称【カン姐、KANNA】

【幻影城北門】受付及び、殺人被害者担当【増長天】。

元婚約者の拓真から、麻里愛が崇られてるから助けてやってほしいと泣き付かれ、やむなく本件に首を突っ込んでしまった。麻里愛

の実母。ちなみに、両親共に麻里愛からは嫌われている。

さしま ななみ  
佐島七海

通称【ナナ】

地元で評判の死亡事故多発丁字路で、一時停止不履行により亡くなってしまった。

拓真の判断ミスにより、怨霊と化してしまう。

## 16 守備隊編第一部 『接触方針』

神奈によって結成された麻里愛守備隊。その大まかな方針は、彼女の守備隊であると名乗り出ることに決定された。続く議題は、どういう手段で怨霊との接触を絶つかだ。

《結界張るか、闘って追っ払うか》

戦術はいろいろあるだろうが、基本的にはこの二タイプに分類されることになるだろう。

《ちーちゃん》

《あたしゃろくな結界張れないし。暴れることなら誰にも負けないけどね》

確かに千鶴は術の素養より格闘の素養が秀でている。雅章自身、正拳突き寸止めを顔面に受け、意識を飛ばしたことがあった。

《おまえの体術は殺人的だからな》

彼にはもはや、苦笑いを浮かべることもしか出来なかった。

このメンバーならおそらくは闘う流れになるだろう。個人的には結界を張りたいたいと考えているのだが、民主主義とは数の暴力なのである。それもしかたの無いこと。雅章は、半ば諦めている。それほどこのメンバーには術の素養が無いのだ。

《とがチンも闘いてえだろ》

もはや聞かなくても解っている。四人の中で最も喧嘩っ早い男なのだ。基本的には「おバカ」なのだが、喧嘩に関する戦術の立て方にはやたら長けていて、この四人による喧嘩バトルロワイアルがあれば絶対にこの富樫達人が生き残ると断言できるほどの知力を発揮する。もしかすると思うほど馬鹿ではないのかもしれない。

《結界が一番無難だとは思っくんすけどね。まあ、TAKUさんが諦めたぐらいなんだから、よっぱど無理な事情があつたってことなんでしょうね》

雅章は、無言で目を見開いている。そして、顎が外れたかの如く



大口を開けていた。

まさかこんなしつかりした理由を述べて来ようとは。

《なんすかその目……。クイズにちゃんと答えた○ザ○又見るような目で見ないでくださいよ》

確かにヘキサゴンで○i○○○や○ザ○又が一撃で正解したのを見ると、こんな顔になるかもしれない。

《まあ、取り敢えずは闘うしかないっしょ？》

納得いかない顔をしながらも、達人はこう締め括った。

《キャノンは？》

《野球一筋十年の体育会系だぞ？ 結界なんて七面倒なことやってられっかよ》

時々、よくこれで野球で大成できたなと思うことがある。本来野球とは、計算のスポーツだ。どこに投げるとどういうスイングをしてくるのか、その結果、どういう当たりが飛ぶのか、その当たりをヒットにさせないためには、シフトをどう移動させねばならないのか。ランナーが居ない状態で一球投げる間にも、これだけのことを計算しなければならない。その状況でランナーが居るとなると、更に厄介な計算が必要となつて来るのだ。

彼の場合、元々能力が高かったのだろうが、それだけではかなり早い段階で頭打ちしていただろう。言い方が悪いがプロになる前に野球人生が終わったのは彼にとって良かったことなのかもしれない。

多数決により、結界は張らずという方向に確定した。

【姿を現しつつも結界は張らず】

一見して無理難題とも思えるこの条件の元に、麻里愛護衛作戦が展開されるのである。

雅章は一呼吸置いて、麻里愛に接触するつもりだ。業務報告もいちいち入れはしない。神奈のことである。黙っていても映し世の鏡で監視するだろうことは解っているのだ。

本来なら、もっと任せてほしいところなのだが、それはもう、人格であるとして諦めている。

取り敢えず、接触する取っ掛かりを見つけないといけない。麻里愛とはなんの関わりも無い雅章にとつては、まさに雲を掴むような話であつたが、その点においては一方的に片思いしている達人が見つけてくれるかもしれない。

ただ、問題なのは、映し世の鏡を作ることが出来ないということなのだ。雅章だけではなく、他の連中も纏めて作れないのだ。

北門広場の僻地。本当にとんでもなく一番外れの場所。そんな郊外での作戦会議は、幻影城側とその北側との天気を、境界線がはっきりと判るほど二つに分けている。

城付近は重荷を下ろした神奈の晴れやかな気持ちを反映した快晴。そして、城から離れるにつれて、徐々に無理難題を吹っ掛けられた雅章が発する曇天へと変わっていった。曇天の主である雅章は、映し世の鏡を調達しようか考えなければならぬ。

《カン姐か？ 無理だな……。拓真さんか？ それか？》

ぶつぶつと一人ごちる。ぶつちやけた話、あまり関わりたくない相手だった。いつも不気味な雰囲気を負っていて、何を企んでいるのか全く得体がしれない。

初対面ではないし、生前も死後も何度か接触したことはあるが、その都度UMAでも相手にしているかのような空恐ろしい感覚に陥

ってしまっているのだ。

《拓真さん、拓真さん、幸長です。麻里愛さんのことで相談があります》

念波を飛ばしてみる。

《おう、マチャアキか！ さては神奈から丸投げされたな？ おまえら映現鏡出せるやつ誰も居なかったよな？》

突然聞き慣れない言葉が出てくる。映現鏡？ よく判らない固有名詞だ。

《おい、しかとかよ……。あ、そつか。おまえらは確か、映し世の鏡ってんだっけか？》

これでやっと映現鏡とやらが何なのか理解するに至った雅章は、間を置かず本題に切り込む。

《すいません、ちよつと聞き慣れない言葉だったもんで。それなんですよ。ちよつと見せてもらえませんかね？》

《かまーねーけど、ぶつちゃけ難しいぞ、今の麻里愛に接触すんの》  
赤星拓真が諦める状況。接触を試みるのは雅章らだと解っている上で諦めている状況。余程酷いことになっているのかもしれない。

よりいっそう気を引き締めて雅章は答えを返す。

《解りました。じゃあ、これからお伺いします》

そして、守備隊員達にも拓真の元へと飛ぶことを伝えた。

## 16 守備隊編第一部 『接触方針』（後書き）

### 人物紹介

ゆきなが まさあき  
幸長雅章

通称【マチャアキ、ユツキー】

増長天配下の中級霊。マスターの娘である麻里愛の警護を丸投げされた【麻里愛守備隊】の隊長。

## 17 守備隊編第二部 『一の丸は佐野勇気』

今、雅章は幻影城西門にいる。勿論千鶴や達人、高敏といった連中も一緒だ。

《増長隊麻里愛守備隊、到着です！》

四人を代表して幸長隊長が大声を張り上げる。

《あーはいはい。ちょっと待っとけよ》

拓真の声だ。聞こえる声なら近いのに、その姿がどこにも確認できない。……、と、突然目の前に神々しく輝く金色の発光体が現れた。いわゆるオーブである。そしてそれは、徐々に人形を成していき、やや小柄な成人男性の体躯と、ツンツンに逆立てたパンク風の髪型を持つ霊体へと変化していく。

革ジャン皮パンツにじゃらじゃらとチェーンを巻き付け、真っ赤に染めた長髪を真上に逆立てた広目天が、雅章の前に、オーブから生まれた。そして彼は、出てくるなり両腕で四角を形作り、そのスクエアを映し世の鏡へと変えてくれる。

出来上がった映し世の鏡を覗き込んだ守備隊一同は、ここに来る前に広目天に云われた「ぶっちゃけ難しいぞ、今の麻里愛に接触するの」という言葉の意味をいやというほど理解することになる。

《これ……、マジであの麻里愛ちゃんっすか……？》

その画面には、かつて門倉麻里愛であると皆が認識していた筈の女性は映っていないかったのである。厳密には認識上の彼女とフォルムが一致する女性なのだが。

そこに映っている女性は、ガリガリに痩せこけ、全く手入れされていない髪をボサボサに伸ばした、やつれ果てている麻里愛だったのだ。

その場にいる誰もが啞然としている中、広目天が一言述べる。

《悪いな……》

鏡の中で麻里愛が暴れている。彼女がいる部屋は、破壊され尽くしていた。壁には大小様々な穴が穿たれ、床には破壊された調度品や装飾品が散乱し、そのうえから撒き散らされた食事が被さっていた。

麻里愛が子宮を摘出したということは神奈から聞いていたが、まさかそれからたったの二日か三日でこんなことになってしまうとは……。精神が見た目に影響を及ぼすと聞いたことがあるが、おそらくこれがその典型例なのだろう。そんなことを思いながら雅章は取っ掛かりを探していた。

少しして一人の若い男が部屋の中に入ってきた。小顔の中分けセミロング。頭部の両脇を覆う髪の間から覗く優しげな顔が、心配気に麻里愛を覗き込んでいる。心から心配している人の顔だ。兄弟か彼氏なのだろうか。

なにやら声をかけた途端に発狂したかのように泣き喚き始めた麻里愛によって、部屋からたたき出されてしまった。

《彼氏とかじゃねえのかな……》

精神の混乱に付け込んだ、不遜な輩かもしれない……。その可能性を考えておかなくてはならないと判断した雅章に、拓真が助け船を出す。

「あれ、たぶん彼氏だ」

彼氏なのだとしたら、随分あっさり引き下がり過ぎではないのだ

ろうか。いや、もしかすると、相思相愛の相手だからこそ自分が不妊になってしまったことを実感させたくながっている麻里愛の意志を尊重したということなのだろうか。

《こいつ、彼氏なら上手く抱き込めないっスか？》

達人が、雅章の考えを察したかのような案を出してきた。そんなのだ。上手くこの男を抱き込むことが出来れば、彼の守護霊であるとして接触できる可能性が出てきたのである。

幾らか気分が楽になってきたからなのだろうか、雅章がふと空を見上げた時、どす黒く染まっていた曇天は、薄曇りへと変わっていた。

《どうする？　ってももう、これしか手無いような気がするけど》

おそらくこれは発言者である雅章以外の者にとっても同じ思いだったのだろう。誰も反対する者はいない。

だが、麻里愛守備隊に対して何の連帯感も持たないこの男は冷静だった。

《無理だな。麻里愛には、かなり強い守護霊が憑いてる。そいつがたぶん彼氏の守護霊をとくに認識してる筈だ》

拓真のツツコミが入ったのである。

《シバきますか……。3発くらい喰らわしときゃいいっしょ》

喰らわすとは言っても、拳や蹴りといった物理攻撃ではない。

衝撃波や気攻といったいわゆるEXPだ。

実体を持たない霊体には、超常的な力しか通じないし、そういった攻撃しか出来ないのである。そしてその威力はその霊体が宿す負の感情の強さによる。殺人被害者であったり、殺しの下手人の濡れ衣を着せられ、【市中引き回しの上打ち首獄門】のお沙汰を受けたりと、麻里愛守備隊の連中は負の感情に満ち満ちているのである。霊力には自信があった。

《あー、たぶんおまえらよか強えぞ、麻里愛の守護霊。あいつ、俺を跳ね退けるプロテクト張ったし》

《！》

四人に驚愕の表情が浮かぶ。この、数多ある神々の中にあつて最もどす黒い存在感を持つこの赤星拓真の霊力を弾き返す力。それはおそらく、とてつもないものだ。

《懐柔すんなら、まずこの佐野勇氣とか言つやつだな》

拓真のアドバイスが入る。確かにここから切り崩していかねければならないようだ。



雅章は晴れ渡る空の下、それとは正反対に沈みきった気分浸っている。

ここはもう、世界の間ではなく、現世である。だが、降りてきたにも拘わらず有効な作戦をなにも思い付かずになっていたのだ。

護衛対象である門倉麻里愛の自宅のすぐ傍、今回の騒ぎの発端となった地、【死の交差点】に降り立ち、必死に考えを巡らせる。自然と行動が荒々しくなってきた。

雅章のすぐ脇にあった石垣を思い切り蹴り付け、繰り出した蹴りが対象を素通りし、石垣の中に飛び込んでしまった。雅章は今、霊体は物理攻撃が出来ないという基本的な事すら忘れてしまうほど冷静さを欠いていた。

「落ち着け雅章。カン姐に報告して俺が隊長に代わってやろうか？」醜態を曝した雅章に高敏が落ち着いて突っ込む。いつもの光景だ。この二人、年齢差はあるもののほぼ同時に北門に配属された同期であり、出世の足並みもほぼ同じなライバルなのである。

「あーあ、また始まるよ、この二人……」

千鶴が肘から下を水平に広げ、ため息混じりに頭を横に振りながらぼやく。

《カン姐？ 悪いんだけどさ、任務開始まで大分時間かかりそうだなわ……》

達人が取り敢えずの近況を早速主人である神奈へと報告する。全く以っていつも通りの展開だ。

《なに、またやっちゃったの？ あのボケ共》

《いい加減メンバー変えたほうが良くないっすか？ あの二人、一緒にいるのぜってーヤベえって》

《でもねー……、あんたら四人はセットじゃなきゃ意味ないんだよね。感情論抜きにしたら増長隊で最強なんだよ、この組み合わせが》

《まあ……、否定はしないっすけどね……》

否定など出来ない。出来る筈もない。精密機械と呼ばれた制球力を持つピッチャーに喧嘩番長と喧嘩女番長、そして、五年連続でレコード大賞を受賞した戦略眼と実力を持つアーティスト。

状況によって様々な戦略を展開でき、攻防一体のオールレンジな動きが可能となるのだ。高敏と雅章の不仲さえ無ければほとんど隙の無い組み合わせなのである。

雅章は途方に暮れていた。全くいい案が浮かばない。達人が定時連絡を入れていたらしいカン姐も、《じゃあ後よろしく》との一言のもとに、一方的に通信を切ってしまったようだ。

「おまえ、脳みそ腐っちゃったか？　まずは何たら勇氣とかいうの落としに行きやいいじゃねえか。結局俺ら、そいつがいるから身動き取れねえんだろ？」

そんなことは解っている。言われるまでもなく雅章にも解っているのだ。だからこそ、慎重になっっているのである。赤星拓真ですら充分に得体が知れないというのに、それをはねのけた靈力を持っているのだ。もし懐柔にしくじってバトルに発展した場合、ほぼ間違いないで負けてしまうのである。

作戦初期での敗北は、護衛対象である門倉麻里愛の死を意味する。今の段階であの様なのである。失敗が許される状況ではないのだ。またそれは、逆に言えばこの佐野勇氣という壁さえ越えてしまえば、後はもう、楽に作戦を遂行できるのだということにほかならない。ここはどうしても慎重にならなければならぬポイントなのである。

「どう乗り込むか……、それが問題なんだよ。麻里愛がない状況で佐野勇気とだけ接触しなきゃならんのだろ？ 背後霊を宿主から引き離すのって、相当てこずるんじゃないのか」

ここなのだ。これが最大の問題なのである。麻里愛に靈感が無いならまだ手の打ち様もあるが、彼女自身もまた、霊の存在を察知することが出来るから厄介なのである。どうしても麻里愛守備隊は「麻里愛に察知される事なく佐野勇気のみ接触する」という無理難題をクリアしなければならなかった。

## 19 守備隊編第四部 『丁字路崩壊のご褒美』

護衛対象である門倉麻里愛に気取られる事なく、その守護霊にのみ接触する。今、麻里愛守備隊の四人はそんな無理難題に立ち向かわなければならなかった。

これはもう、どう考えても無理難題だ。

「なあ雅章、お前の作戦、どう考えても無理だよ。俺がなんたら勇気にブラッシュボール喰らわしてやつから、それで逆襲に来たところをとっ捕まえようや。な？」

案が浮かばずに冷静さを失いつつある雅章に、高敏が代案を提示する。野球で培った制球力を駆使して勇気の頭部に霊気弾を喰らわせ、その攻撃に対する反撃に出てきた時を狙って接触しようというのだ。

「避けられたら終わりだろ！ お前200キロ超える球投げれるのか！？ モーション起こしてから3秒以内に投げれるのか！？」

「別に当てる必要ねえだろ！ そりゃ当てれりゃ確定けどな、でも当たらなくても攻撃の意志が見え見えなんだから、普通反撃してくんだろ！」

また雅章と高敏の怒鳴り合いが始まってしまった。

犬猿の仲というほどでもないが、犬猫の仲ぐらいには相性が悪い。罵り合いのとばっちりを受け、周りの生け垣やら庭木やらが風も無いのに台風でも通過しているかのように幹から激しく揺れる。

「あのー、おもくそ自然が壊れてるんすけど……」

物怖じしないタイプの達人さえもが身震いしてしまうほど激しい勢いで、大きな榎が根っこから倒れてしまった。家に向かって倒れていったそれを、霊圧を帯びた蹴りでとっさに反対側へと弾き返した千鶴の判断力はさすがの一言に尽きるだろう。

千鶴の好判断によって家屋直撃を免れた榎が、達人を直撃してしまったのはご愛敬だ。

周囲の環境に少なからず影響を及ぼし始めた二人の不仲をいつもの通りに残った二人が修正していく。

「あのね、ちよっと思っただけどさ、麻里愛ちゃんに結界張らしや済むんじゃないのかい？ 悪霊退散系の」

千鶴が掴み合いに発展した二人の間に割って入る。その際、空手チョップ（勿論霊圧武装有り）により二人を引き剥がすことも怠らない。

「そうっすねー、じゃあ俺ら正直に名乗っちゃいますか、【岩国神奈の手下です】ってさ」

自虐気味に笑いながら、達人がそれに乗る。どうやらこの二人は、勇気のみとの接触は絶対に無理であると諦めてしまっているらしい。

提案を受けた高敏と雅章が、千鶴と達人を睨み付ける。

「おまえら肝心なこと解ってねえのな。一度機嫌損ねちまったらもう二度と接触できなくなっちまうんだよ！」

運転者の視界を著しく奪っていた丁字路右側の不格好な生け垣が二人の怒気に触れ、3メートルほど跳ね上がった。麻里愛守備隊到着からたったの一時分少々で、多くの命を轢き潰してきた【死の交差点】が完全崩壊してしまった。

生け垣の壊滅によって全く見通しの効かなかった丁字路の右側は、今までとは逆に恐ろしいほど視界が開けてしまった。これでおそらくは死亡事故の数も半分ぐらいには減ってくれることだろう。

思わぬところで人様の役に立ってしまったものだが、彼らが問題にしなければならぬのはあくまでも麻里愛であり、死の交差点ではない。あまりの間抜けさに四人は腹を抱えて笑い出してしまった。「はあ、ひい、久々に笑ったあー。さあて、麻里愛ちゃんどうしょつか？ そろそろ纏めちゃわないとね」

気付けば、いつの間にか場を仕切っているのが雅章隊長から千鶴

へとスイッチしている。

「あくまでも俺らは、広目天とも増長天とも無関係だっていうスタンスは崩せないよな」

「そーっスねー」

「じゃあよ、これどうよ。俺らの目的は佐島七海を成仏さすことだつてことにしてまーチャンの背中、間借りさしてもらうの」

この高敏の提案に、一同ははっとした。彼らは護衛対象である麻里愛のことばかり考えてしまい、事件の根底にあるものを丸つきり無視していたことにやっと気付いた、否、気付くことができたのだ。「そうだな、それで行こう」

雅章の一言で、漸く方針は固まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7631a/>

---

「なんで……？」

2010年10月14日18時40分発行